

(様式1)

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成27年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名 (推進地域)	静岡県	番号	22
-----------------	-----	----	----

市町村名 (推進地区名)	協力校名	児童生徒数
三島市	三島市立錦田小学校	573人
焼津市	焼津市立和田小学校	387人

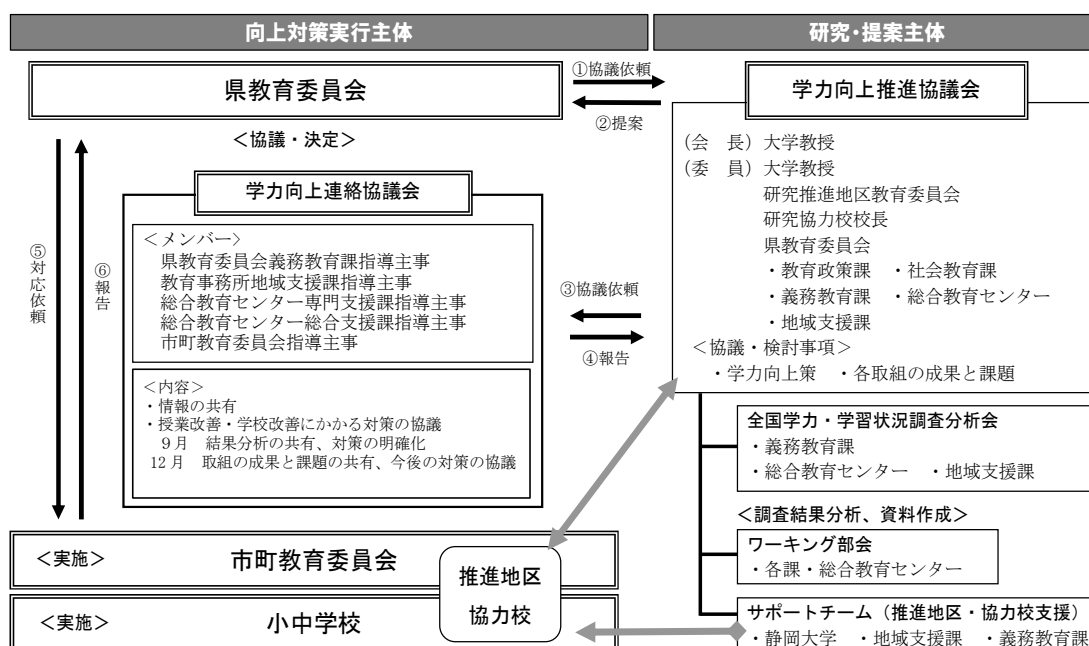
○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

＜学力向上推進プロジェクト事業＞【(1)～(6)】

全国学力・学習状況調査結果を受け、静岡県小中学校の学力向上のため、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善を支援する環境づくりや推進地区、協力校による実践研究を通して具体策を検討するとともに、更なる改善プランをまとめ、啓発していく。

平成27年度 学力向上推進プロジェクト事業スキーム



(1) 静岡県学力向上推進協議会の設置（年3回）

推進地域、推進地区、協力校の取組や課題を踏まえた上で、重点課題を解決するための手だてを吟味し、推進地域、推進地区の学力向上に関する施策を見直すとともに、協力校における授業改善等の取組について協議を行った。

推進地区、協力校へのサポート方法、内容について確認するとともに、全国学力学習状況調査分析会への助言を行った。

本協議会において協議された内容や全国学力・学習状況調査分析会における分析内容を「学力推進協議会報告書」にまとめ、定例教育委員会において県教育委員会教育長に手交するとともに、県内全市町教育委員会、全小中学校に配布した。

(2) 推進地区、協力校へのサポートチーム派遣

推進地区、協力校の課題解決へ向けて、効果的なサポートができるようにサポートチームを編成し、派遣した。今年度は、静岡大学、県教育委員会義務教育課とともにそれぞれの推進地区を所管する教育事務所地域支援課がサポートチームとして継続的に支援を行うことにより、推進地区や協力校の実態を把握し、効果的なサポートを行うことができるよう努めた。

- ・校内研修の進め方、内容に関する指導・助言
- ・研究授業に対する指導・助言
- ・研究発表会の進め方、内容に関する指導・助言
- ・授業改善に関する講義

(3) 全国学力・学習状況調査分析会の実施

4・5月…全国学力・学習状況調査問題分析→全小中学校研修主任へ説明

5月…「早期対応策」（全国学力・学習状況調査実施後、各校が独自に採点・分析等を行い、児童生徒の学力に関する課題を把握し、早期に授業改善、個別指導に生かす取組）データの集計と分析

7月…「チア・アップコンテンツ」（全国学力・学習状況調査の問題や本県の現状と課題について共有し、早期に学校改善、授業改善に生かすための教員用動画コンテンツ）の作成→県教育委員会Webページへ掲載

8月…全国学力・学習状況調査結果分析→全市町教育委員会指導主事へ説明

9月…「チア・アップコンテンツ」（家庭学習のポイントを示した保護者用動画コンテンツ）の作成→県教育委員会Webページへ掲載、全小中学校へDVDを配布

5～11月…「学力向上推進協議会報告書作成」→全市町教育委員会、全小中学校へ配布

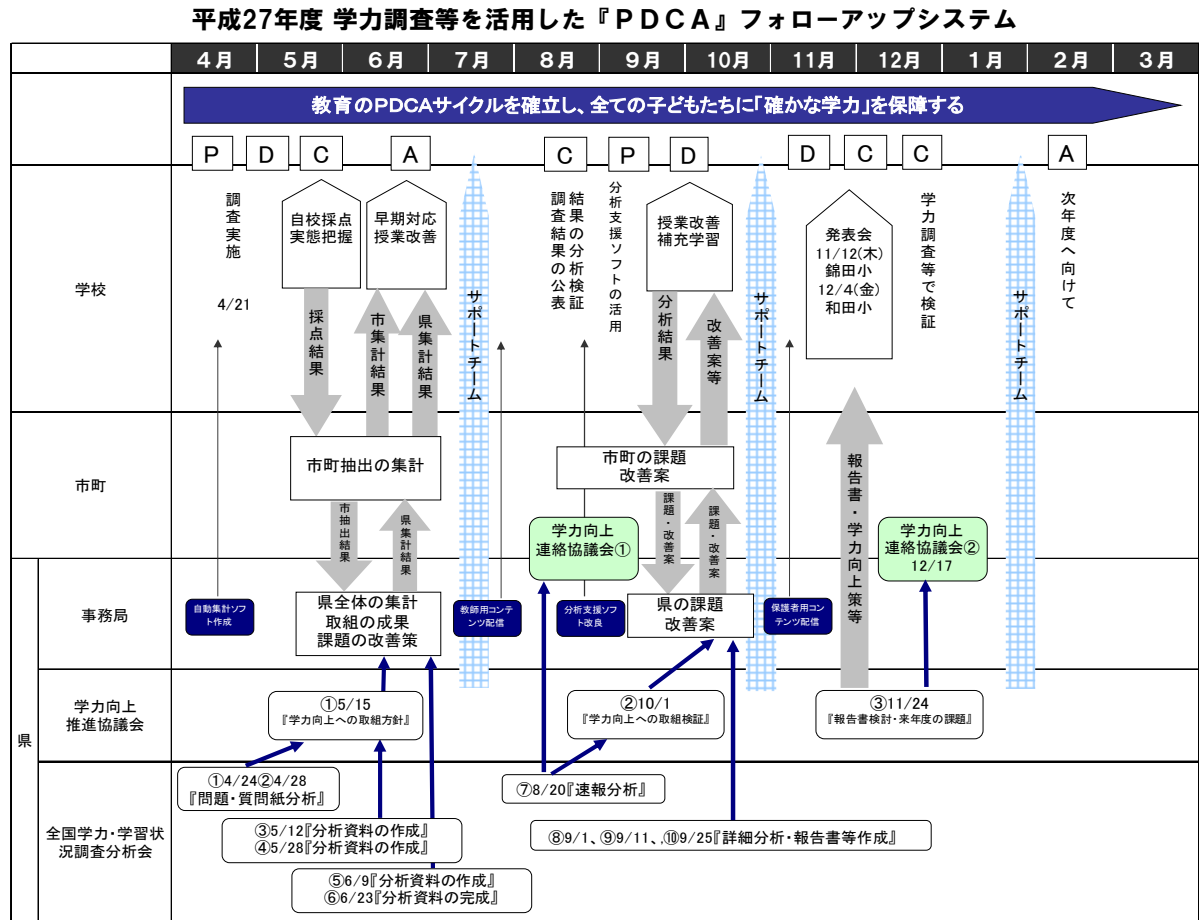
(4) 学力向上連絡協議会の実施（年2回）

推進地区をはじめ、各地区における授業改善、校内研修の充実を図るために、県教育委員会と市町教育委員会の学力担当指導主事等が一堂に会して、県内小中学校の学力や授業改善の現状等について情報を共有するとともに、より有効な学校支援の在り方や学力向上に係る具体的な取組等について協議を行った。

(5) 全国学力・学習状況調査分析支援ソフトの改善

全国学力・学習状況調査結果から自校及び、個々の児童生徒の学力・学習状況を把握・分析し、学校における児童生徒への教育指導の成果や課題を学校改善や授業改善に生かすことを目的に、文部科学省から送付されるデータに合わせて、自校の調査結果を詳細に分析できるソフトを改善し、各学校で活用できる環境を整えた。

(6) 全国学力・学習状況調査を活用したPDCAフォローアップシステムの構築



2. 推進地区における取組

(1) 三島市の取組

ア 三島市の学力、生活習慣、学習環境等の把握と分析

三島市の学力等を分析し、児童生徒への指導の充実や学習状況の改善に役立てるために、「三島市学力分析検討委員会」を設置し、年3回開催した。国語、算数・数学、理科、質問紙の4部会、計15名の委員で構成している。

「第1回三島市学力分析検討委員会」では、三島市の調査結果を受け、県の分析結果の伝達及び市の調査結果の概要の把握に努めた。第2回、第3回の分析検討委員会では、より詳細な分析を行い、分析結果と対策を学校と家庭の両方に伝達した。

イ 三島市の調査結果の概要、分析結果、改善への方向性の伝達

「三島市学力分析検討委員会」において分析した三島市の調査結果と改善の方向性を各学校へ伝えることと校内研修をより充実・活性化させるために、研修主任を対象とした「三島市学力高上研修会」を、年3回開催した。「第1回学力高上研修会」では、早期対応による三島市の自校採点結果の概要を伝達するとともに、校内研修についての情報交換を行った。

ウ 学校支援の充実

(ア) 校内研修等支援訪問の実施

学力向上担当指導主事が、市内全小中学校を訪問し、研修主任、教務主任と懇談した。全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、各学校が成果と課題

をどのように捉え、それらをどのように校内研修に活用していくのかを確認し、各学校の実態に合わせた支援を行うようにした。

(イ) 市内小中学校への支援（要請訪問）

各学校からの要請に応じて、指導主事が学校を訪問し、校内研修で講義をしたり、授業研究の指導・助言を行ったりした。学年単位での要請にも応え、学年研修への参加や、指導案検討等にも参加した。三島市教育委員会と学校が協力して授業改善に向けて取り組めるように、積極的に要請を受けている。

(ウ) 研究協力校（錦田小学校）への支援

研究の方向性や指導案、言語活動を位置付けた授業づくりなどについて指導・助言を行った。研修主任と連絡を密に取り、研究の具体的な手立てや検証方法、授業で重点的に取り組む内容などについて話し合った。指導案については、単元を構想する段階から関わり、言語活動の設定が適切かどうかなど、助言した。また、研究授業を参観し、事後研修において、具体的な子どもの姿を通して、学びの成果や授業の課題について話すことで、研修を支援することができた。

エ 教員の指導力・授業力向上を図る取組

(ア) スキルアップ研修における「教師力向上研修」

「小学校国語科授業づくり研修」「小学校算数科授業づくり研修」「小学校体育研修」「小学校外国語活動研修」「道徳教育研修」「生徒指導・学級経営研修」の6講座を実施した。希望研修として行ったが、155名の参加者があり、参加者の満足度が高かった。

(イ) 三島市教員力継承事業（4年次研修）

新規採用から5年目くらいまでの期間に、教員としての総合力を高めることと、これまで培ってきた経験を5年経験者研修、10年経験者研修につなげていくことを目的として、新規採用から4年目になる小中学校教員を対象とする訪問を実施した。学習指導、生徒指導、学級経営等に関する内容や、学校長が対象教員に必要なだと考える内容について、希望に応じ指導・助言を行った。

(2) 焼津市の取組

ア 全国学力・学習状況調査結果の活用

(ア) 早期対応策

市内全小中学校で、調査後に自校採点を行った。受検した児童生徒の実態を把握するとともに、自校の取組についての検証を行い、本年度の研修の方向性を確認するなど校内研修に活かした。

(イ) 結果検討委員会の設置

結果検討委員会の分析により、日頃の授業と焼津市の子どもの課題を照らし合わせて要因を分析し、市全体の取組の見直しや各教科の授業改善のポイントを明確化した。その上で、各教科の学力向上に向けての提言と具体的な実践例をまとめ、各学校へ配信、全教員へ配付した。併せて、各種研修会で説明し、各校への浸透及び活用を促した。

イ 研修会等の充実

各会の目的を明確にしてその内容につながりを持たせるとともに研修主任が自校で伝達する必要を感じ、授業改善を促す材料にする内容を企画した。第1回研修主任者研修会では、「焼津市の授業改善の重点」と自校の校内研修の関連を明確にして、焼津市の目指す授業について共通理解を図った。第2回研修主任者

研修会では、総合教育センター指導主事を講師に招聘し、理科の全国学力・学習状況調査問題と子どものつまずき等から、改善が必要な点を考える機会とした。第3回研修主任研修会では、本年度の成果を報告し合い、次年度の研修の見直しをもつことができた。

ウ 研究協力校（和田小学校）への支援

県のサポートチームと連携をとりながら校内研修の内容や進め方等についての支援を行った。（「算数における教師と子どもの目標の共有」「ねらいに沿った振り返り」についての指導を県サポートチームに依頼。「教師と子どもが目標を共有するための手だて」「教師も子どもも学習について確認できる振り返りの手だて」「学習内容を定着させるための手だて」についての指導を静岡大学教職大学院村山教授に依頼。）

和田小学校の研究内容を研究発表会や校長会、教頭会、研修主任研修会等で報告したり、市のWebページに掲載したりすることで取組の普及と共有を図った。

エ 家庭への啓発

焼津市版家庭教育啓発のリーフレットを小学生、幼保園児保護者、小中教職員に配布し、学校での取組について共通理解を図るとともに、学校・幼保園・公民館・図書館等公共施設にポスターを掲示し、取組を広く地域にも発信した。リーフレットについては、保護者会等での活用を促し、共育体制の構築を図っている。

全国学力・学習状況調査結果から、焼津市の子どもによさと課題を示した。併せて、焼津市の目指す授業についても説明する内容を加え、付けたい学力について家庭の理解を促した。

3. 協力校における取組

(1) 三島市立錦田小学校の取組

ア 全国学力・学習状況調査（6年生）、標準学力調査等の実施（1～5年生）クロス集計から明らかになった学校全体の課題「書く（かく）力」の育成について全教員で共通理解を図り、効果的な“かく”活動を位置付け、「付けたい力」に迫る授業づくりに努めた。

児童個々の課題については、個別に開示し、課題意識を持って一人一人の学習・生活改善につなげていった。また、保護者に対しても学校全体の傾向や個人の結果を示し、生活規律の改善や読書習慣の励行、家庭学習の在り方について啓発し、学校と家庭との連携・協働の強化を図った。

イ 授業改善の視点の焦点化

子どもの主体的な学びを引き出すために、学習指導要領の目標や内容を押さえた上で、児童の「問い」に焦点を当てた授業を展開した。目的意識、相手意識を明確にし、子どもの実態に合った単元を貫く言語活動（重点として“かく”活動の充実）を授業の中に設定した。その際、子どもが自分の考えをつくる場面、自分の考えを深めたり広げたりする場面に「（思考・判断・表現としての）かく活動Ⅰ」を、教師が授業内容をまとめ、その後、子どもが学習内容、学習方法を振り返る場面に「（振り返りとしての）かく活動Ⅱ」を授業の中に位置付け、全職員で実践を重ねた。

ウ 家庭学習の啓発

「自己課題を持ち、計画的に学習を進める子」を目指して、家庭学習を習慣付けるための支援方法、目安となる時間等を示した「家庭学習のすすめ」を配布し、啓発を行った。発達段階に応じた「予習型」「復習型」「自主学習型」のノートの作成等についての指導を進めた。

読書活動は、昨年度の取組に加え、学年毎に「おすすめの本 50 冊」を定め励行するとともに、児童を称揚した。読書時間や習慣の拡大に繋がるような良書の紹介や、学習と関連した並行読書の励行なども進めた。

エ 個々の学びを保障する指導体制の充実

学力向上の基盤となる学級経営の一環として、学習上又は生活上困難のある子どもへの学習支援や生活支援に取り組み、ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を構成した。

個別の支援を充実させるために、TTや少人数学習等の授業形態を推進し、個の学びに柔軟に対応できるようにした。また、スクールカウンセラーや特別支援教育巡回相談員、スクールソーシャルワーカーを介して関係機関と連携し、学び難さを抱える児童への支援の在り方を検討し、教員や特別支援教育非常勤講師、低学年支援員が特性を踏まえて指導を行った。

(2) 焼津市立和田小学校の取組

「静岡県の子どもの学力向上のための提言」をもとに実践研究を進めた。

静岡県の子どもの学力向上のための提言

- 1 学習指導要領が求める学力をより明確にして、授業改善に努めます
- 2 教員の指導力向上に努めます
- 3 「全国学力・学習状況調査」の問題や結果を活用します
- 4 子どもが主体的に家庭学習に取り組む環境を大切にします
- 5 子どもの学びを支える取組を支援します

平成 25 年 11 月 11 日

静岡県・政令市・市町教育委員会代表者会

ア 「学習指導要領が求める学力をより明確にして、授業改善に努めます」については、「付きたい力」を「付けるべき力」と位置付け、「深め合う子」をテーマに付けるべき力が身に付く授業の創造に取り組んだ。「授業で学ぶことを教師と子どもが共有すること」と「ねらいに沿った振り返りを行うこと」を研究実践の重点として設定した。

イ 「教員の指導力向上に努めます」については、「午前 5 時間制」を導入することで、「和田の授業づくり（教材研究・授業準備・児童理解）」の時間を確保した。

ウ 「全国学力・学習状況調査の問題や結果を活用します」については、推進地域の学力向上プロジェクト事業と連携し、全国学力・学習状況調査の結果を活用した授業改善に取り組んだ。

エ 「子どもが主体的に家庭学習に取り組む環境を大切にします」については、推進地域の家庭学習のポイントを示した保護者用動画コンテンツや推進地区の家庭教育啓発リーフレットを活用し、保護者や地域との連携を深めることで基本的な生活習慣や規範意識の定着、学力向上に向けた家庭学習の充実をめざした。

オ 「子どもの学びを支える取組を支援します」については、日本語指導の必要な外国籍児童等に対する支援、読書活動の充実、ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりに取り組んだ。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 三島市立錦田小学校の成果

ア 学習状況について

全国学力・学習状況調査、標準学力調査・総合質問紙調査、静岡県定着度調査において、従来課題であった国語の長文読解と記述式問題、算数の考え方を説明する問題の正答率に向上が見られた。また、国語が好きな児童の割合が平成26年度は46.3%であったが平成27年度は58%と向上している。

校内研修の重点に「かくこと」を位置付けた国語における授業改善の取組が児童の学力向上につながることを教員が認識しており、こうした取組は他教科にも広がりつつある。

イ 生活状況について

家庭学習においては、自己課題を持ち計画的に学習を進める子を目指し、教員が児童や保護者に対して学習指導と啓発活動を行うことができた。しかし、児童、保護者の意識の向上に十分つながっていないため、今後も継続した取組が必要である。

読書活動においては、学習と関連付けた並行読書、学年ごとの「おすすめの本50冊」の選定、図書ボランティアによる読み聞かせなど、司書教諭、学校司書を中心に児童が読書に関心を持つための取組を進めたことにより、目標としていた全校児童平均週一冊以上の読書量を達成することができた。

(2) 焼津市立和田小学校の成果

ア 「付けるべき力」について

過去3年間の全国学力・学習状況調査結果を標準化得点から見てみると、国語、算数ともに伸びが見られた。特にB問題において伸びが顕著であった。これは、目的に応じて文章を読んだり、条件に従って文章を書いたりする場面や根拠をもとに筋道を立てて自分の考えを説明する場面を意図的に設定するなど、付けるべき力を明確にした授業改善の成果と考える。

イ 学習状況について

国語、算数ともに「授業の内容がよく分かる」割合が大きく伸びた。また、生活面の課題であった「基本的な生活習慣」と「規範意識」に対する意識に大きく改善が見られた。

ウ 和田の授業づくりについて

教師へのアンケート結果からほとんどの教師が「午前5時間制」の導入により、「子どもたちの具体的な表れをもとに教材研究を深めることができた」「学年で授業について相談できる時間が増えた」等、昨年度に比べて、「和田の授業づくり」に取り組む時間の増加を実感していることが検証できた。

2. 実践研究全体の成果

学力向上推進プロジェクト事業を中核に本調査研究を進めたことにより、推進地域、推進地区、協力校の間で、学力向上へ向けた具体的な支援や取組について共通理解を図ることができた。また、県教育委員会義務教育課とともにそれぞれの推進地区を所管する教育事務所地域支援課がサポートチームとして継続的に支援を行うことにより、推進地区や協力校の実態を把握することができ、効果的なサポートを行うことができた。

推進地区においては、全国学力・学習状況調査結果をこれまで以上に有効活用し、授業改善につなげようとする意識の高まりが見られた。また、協力校が抱える課題に応じた学校訪問が行われ、協力校の研究を手厚く支援する体制が整ってきている。

協力校においては、国が求める学力に対する理解の深まりとともに、客観的なデータに基づいた学力検証サイクルが構築され始めている。また、サポートチームや推進地区の指導主事の支援により、各教員の授業改善への意識の高まりが見られる。

推進地域全体において、全国学力・学習状況調査問題や調査結果、また分析資料、研修用資料等の学校現場における活用が定着してきた。全国学力・学習状況調査を授業改善に生かすという視点も浸透しつつある。市町教育委員会においても、学力調査分析会等を立ち上げ、地域住民や保護者、管内の学校へ分析結果を提供するなど、本調査を活用した学校から家庭への「学びの連結」に努めようとする動きが見られる。

3. 取組の成果の普及

(1) 推進地域

学力向上連絡協議会において、推進地区や協力校の研究実践をグループ協議の中で発表する機会を設定した。協力校が研究実践・成果等を公開する研究発表会の準備・運営において指導・支援を行った。県内全教職員を配布対象とする教育委員会広報誌「Eジャーナル」に推進地区や協力校の研究実践を掲載した。

(2) 推進地区

ア 三島市

第3回学力高上研修会において、協力校の研究経過を発表する時間を設け、協力校の成果の普及を図り、市内小中学校の学力向上に関する取組への推進に努めた。

11月12日に研究発表会（授業公開、研究概要の説明、分散会、講演）を実施し、2年間の研究成果の普及を図った。研究概要については、学校のWebページにも掲載した。

イ 焼津市

第3回研修主任研修会において、第2回和田小中学校合同研修会中心授業の授業案を取り上げ、授業を構想する際に必要なことを明確にするとともに、協力校が大切にしている「付けるべき力の明確化」「見通しをはっきりさせた単元構想」「適切な言語活動の位置づけ」の取組の普及を図った。

12月4日に研究発表会（授業公開、研究概要の説明、講演）を実施し、2年間の研究成果の普及を図った。研究概要については、市のWebページにも掲載した。

○ 今後の課題

学力向上連絡協議会や協力校の研究発表会等により推進地区、協力校における研究実践が他地区にも広がりを見せつつある。今後も、学力向上推進プロジェクト事業を通して、推進地区、協力校の研究実践を広く県内に発信し、推進地域内で優れた取組を共有できるようにしていきたい。

また、本実践研究で構築した全国学力・学習状況調査を活用したPDCAフォローアップシステムを推進地域全体に定着させ、本県の課題をさらに焦点化した上で、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善に取り組めるよう更なる改善プランをまとめ、啓発していく必要がある。

(様式2)

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成27年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名 (推進地域)	静岡	番号	22
-----------------	----	----	----

市町村名 (推進地区名)	三島市
-----------------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

全国学力・学習状況調査結果をふまえた学力向上を図るための学習指導の工夫・改善

〈本研究を通して達成しようとする目標〉

- ・学力定着に課題を抱える学校数[※]を減らす。
- ・国語が好きな児童生徒の割合を増やす。
- ・授業の学習内容を振り返る活動をする児童生徒の割合を増やす。
- ・全国学力・学習状況調査の結果等を活用したP D C Aサイクルの推進。

※学力定着に課題を抱える学校

全国学力・学習状況調査における国語または算数・数学のA問題またはB問題のうち、いずれか2つ以上が全国平均を下回った学校。

2. 研究課題への取組状況

(1) 三島市の学力、生活習慣、学習環境等を把握し分析する

三島市の学力等を分析し、児童生徒への指導の充実や学習状況の改善に役立てるために、「三島市学力分析検討委員会」を設置し年間3回開催した。国語、算数・数学、理科、質問紙の4部会、計15名の委員で構成している。

静岡県の実績報告書の分析結果の伝達及び三島市の調査結果の分析を行い、授業改善を図るための具体策を検討した。また、生活習慣、学習習慣等を把握し、学校や家庭で見直していくべき点を明らかにした。

(2) 三島市の調査結果の概要、分析結果、改善への方向性を発信する

ア 三島市学力高上研修会の実施

三島市の分析結果等を各学校へ伝えることと、校内研修をより充実・活性化させるために、研修主任を対象とした「三島市学力高上研修会」を、年間3回開催した。

- ・第1回：早期対応による三島市の自校採点結果の概要伝達と、校内研修についての情報交換。
- ・第2回：平成27年度全国学力・学習状況調査の三島市の結果についての伝達と自校の分析結果についての情報交換。
- ・第3回：静東教育事務所三島市担当指導主事を招聘し、「校内研修を充実・活性化させるには」と題した講話を依頼。「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における研究協力校の取組（錦田小）の紹介。三島市における校内研修の取組状況について。

イ 校内研修等支援訪問の実施（市内全小中学校訪問）

学力向上担当指導主事が、市内の小中学校21校を訪問し、研修主任、教務主任と懇談する。全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、各学校が成果と課題をどのように捉え、それらをどのように校内研修に活用していくのかを確認し、各学校の研修に合わせた支援を行った。（21回訪問）

ウ 保護者向けリーフレットの配布

三島市の調査結果を受け、学校や家庭で心がけていきたいことをまとめたリーフレットを作成し、小中学校教員と保護者を対象に配布した。また、市のホームページにも掲載した。[資料1](#)

エ 市民に調査結果を公表

三島市の調査結果の概要を、「広報みしま」11月1日号にて知らせた。

[資料2](#)

オ 各学校からの発信

各学校ごとの調査結果や分析結果は、「学校だより」等で知らせたり、個別面談の中で説明したりした。

(3) 学校への支援を充実する

ア 協力校（錦田小）への支援

研究の方向性や指導案、言語活動を位置付けた授業づくりなどについて指導・助言を行った。

研修主任と連絡を密に取り、研究の具体的な手立てや検証方法、授業で重点的に取り組む内容などについて話し合った。指導案については、単元を構想する段階から関わり、言語活動の設定が適切かどうかなどを助言した。また、研究授業を参観し、事後研修において、具体的な子どもの姿を通して、学びの成果や授業の課題について話すことで、錦田小の研修を支援した。（11回訪問）

イ 市内小・中学校への支援（要請訪問）

各学校からの要請に応じて、指導主事が学校を訪問し、校内研修で講義をしたり、授業研究の指導・助言を行ったりした。学年単位での要請にも応え、学

年研修への参加や、指導案検討等にも参加している。三島市教育委員会と学校が協力して授業改善に向けて取り組めるように、積極的に要請を受けている。

(2月末現在：91回訪問)

(4) 教員の指導力・授業力向上を図る

ア スキルアップ研修における「教師力向上研修」

昨年度、8月末に実施した「若手教員教師力向上研修会」が好評だったため、今年度は若手に限らず様々な経験年数の教員を対象に、「小学校国語科授業づくり研修」「小学校算数科授業づくり研修」「小学校体育研修」「小学校外国語活動研修」「道徳教育研修」「生徒指導・学級経営研修」の6講座を実施した。希望研修として行ったが、155名の参加者があり、参加者の満足度も高かった。[資料3](#)

イ 三島市教員力継承事業（4年次研修）

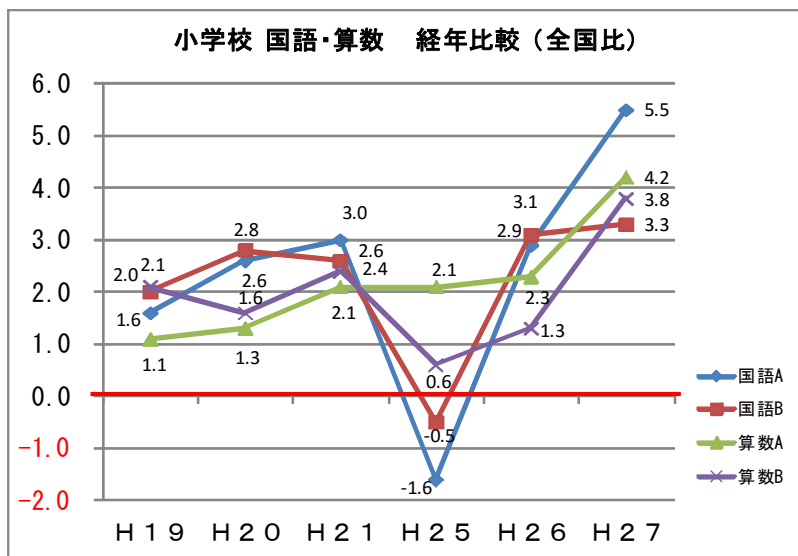
新規採用から5年目くらいまでの期間に、教員としての総合力を高めることと、これまで培ってきた経験を5年経験者研修、10年経験者研修につなげていくことを目的として、新規採用から4年目になる小・中学校教員を対象とする訪問を実施している。訪問回数は1回以上とし、各学校の要請に応じて、指導主事が対応する。

学習指導、生徒指導、学級経営等に関する内容や、学校長が対象教員に必要なだと考える内容について、希望に応じ指導・助言を行った。今年度の対象者は13名で、そのうち10名は年度中2回、3名は1回の訪問を実施した。4年目教員に対して、個別に指導・助言を行ったことにより、自己の課題を明確にし、課題解決のための意欲を高めることにつながった。[資料4](#) (23回訪問)

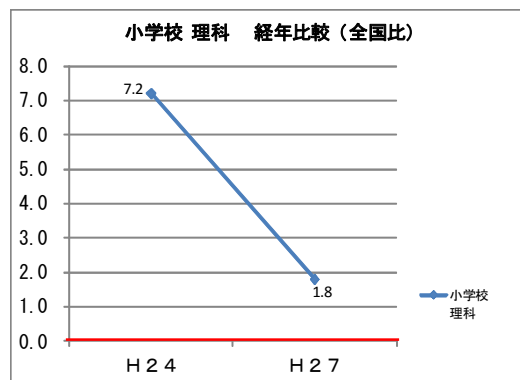
3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査の結果から

(グラフ1)



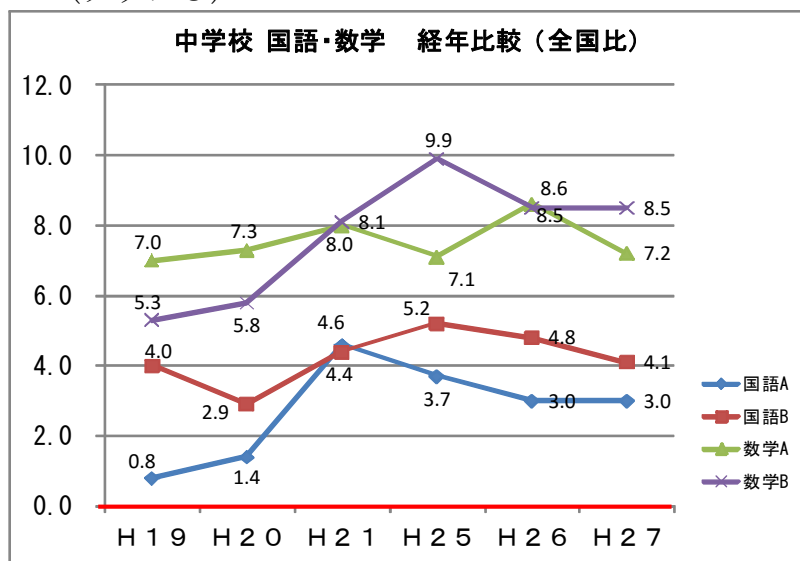
(グラフ2)



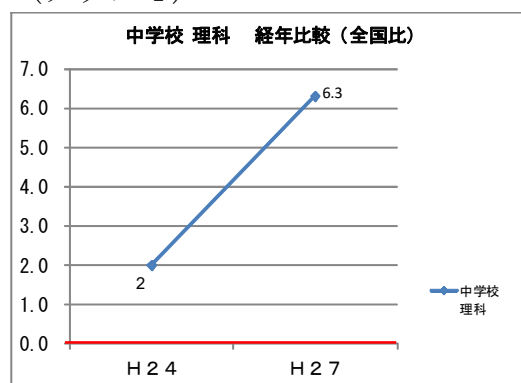
小学校においては、平成 25 年度の全国学力・学習状況調査で、小学校国語 A、国語 B が全国平均を下回り（全国比 A -1.6、B -0.5）、国語科の学力定着に課題を抱えていた。また、小学校算数 B も全国平均は上回っているものの低下傾向にあった。平成 26 年度は、小学校の全ての教科において改善傾向が見られ、国語 A、B とともに全国平均を上回った（全国比 A +2.9、B +3.1）。平成 27 年度においても、全ての教科で全国平均を上回り、（グラフ 1）にあるように、平成 26 年度よりもさらに全国平均を上回る結果となった。

理科は、平成 24 年度の抽出調査の正答率と今年度の正答率を比較すると、全国平均は上回ったものの、低下傾向にある（グラフ 2）。

（グラフ 3）



（グラフ 4）



中学校においては、全ての教科において全国平均を上回る高い正答率を維持している。全国比に着目すると、平成 25 年度から平成 26 年度にかけては、国語 A、B、数学 B は低下しているが、数学 A は上昇している。平成 27 年度は、国語 A と数学 B は平成 26 年度とほぼ同じ水準を維持している（グラフ 3）。

理科についても、全国平均を大きく上回る結果となった（グラフ 4）。

(表1)学力定着に課題を抱える学校の国語、算数・数学の正答率の推移

		H25					H26					H27					
		国 A	国 B	算 ・ 数 A	算 ・ 数 B	課 題 ★	国 A	国 B	算 ・ 数 A	算 ・ 数 B	課 題 ★	国 A	国 B	算 ・ 数 A	算 ・ 数 B	課 題 ★	
小	A	-0.4	-5.0	+0.8	+3.7	★	-0.6	+0.9	0	-4.6	★	+9.5	+3.5	+3.6	+6.9		
	B	-5.1	-4.1	+0.3	-5.4	★	+1.5	+2.3	-2.4	-0.4	★	+4.7	+4.4	+5.9	+4.6		
	C	-6.3	-14.8	-10.4	-7.5	★	-1.4	0	-5.9	-9.2	★	+3.0	-8.9	-1.3	+0.9	★	
	D	-1.5	-5.0	+3.8	-0.2	★	+6.1	+0.8	+4.4	+4.2		+3.7	-0.6	+0.2	+3.5		
	E	-1.7	-3.6	+1.1	-2.6	★	-3.7	+3.1	0	-0.3	★	+0.6	+0.8	-5.4	-3.8	★	
	F	-0.9	+6.4	-1.7	-0.3	★	+8.9	+11.6	+8.9	+4.9		+7.5	+12.4	+6.1	+7.7		
	G	-3.3	+0.9	+2.6	-1.6	★	+2.7	+3.0	+3.2	+2.3		+6.6	+1.0	+2.3	+2.0		
	H	-9.0	-4.2	+3.1	-5.6	★	-2.4	+0.7	-3.3	-0.1	★	+3.7	+1.1	+3.0	+0.6		
	I	-6.4	-7.4	-2.8	-9.8	★	+5.4	+3.5	+4.4	+5.1		+2.6	+0.9	+6.1	+1.5		
	J	-2.2	+1.2	+4.1	+3.6		-3.5	+1.2	-0.7	-7.7	★	+0.8	-1.8	+4.8	+0.5		
中	K	-0.6	+1.6	+1.5	+2.3		-0.2	-1.7	+4.8	+2.2	★	+0.3	-1.2	+3.3	+5.6		
学力定着に課題を抱える学校数					9						7						2

学力定着に課題を抱える学校数を経年比較すると、三島市 21 校中、平成 25 年度は 9 校、平成 26 年度は 7 校、平成 27 年度は 2 校である。市全体の正答率が上がっただけでなく、市内学校間の格差も縮まってきていると考える。また、平成 25 年度に課題となっていた国語 A が、平成 27 年度は、市内全小中学校が全国平均を上回った。全国学力・学習状況調査は学力の特定の一部を示すものであるが、調査結果を分析し、授業改善につなげることによって、平均正答率が上昇したことは成果の一つである。

また、質問紙調査の「授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたか」に対して、肯定的に答えた児童生徒の割合は、(表 2) のようになっている。平成 26 年度と平成 27 年度を比較すると、振り返りを行っていると答えた割合は少しずつだが高まっている。学習内容の振り返りを意識して、授業を実施している教員が増えたのではないかと考える。

(表2)授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていた、と答えた児童生徒の割合 (%)

		H26	H27
小	三島市	66.3	69.9
	全国比	-5.6	-5.4
中	三島市	53.9	55.5
	全国比	+0.6	-3.8

(2) 学力向上を図るPDCAサイクルについて

「三島市学力高上研修会」や「校内研修等支援訪問」を実施する中で、各学校の取組状況を把握したところ、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、各学校が成果と課題を捉え、校内研修に活用している学校が多いことが明らかになった。早期対応で自校採点をする時に、全教員で解答用紙を分担して、採点する学校が増え、教員全体で設問内容を把握すると共に、結果を分析して授業改善へつなげることができてきている。

また、指導主事が各学校を訪問し、全国学力・学習状況調査の分析結果と訪問校の研修内容を結びつけて、授業改善の視点を提示したり、研修資料を準備したりしたことは、三島市の学力向上を図る一つの契機になったと考える。

市が学校を支援し、共に子どもたちを育てていくという姿勢を示すことは、市と学校の連携を促進する上で、有効な手立てとなった。**資料5**

4. 今後の課題

学力向上を図るには、学力の三要素の一つである「主体的に学習に取り組む態度」を育むことが大切だと考える。

〈本研究を通して達成しようとする目標〉に挙げた「国語の好きな児童生徒の割合を増やす」点については、依然として課題がある。特に小学校では、国語の好きな児童の割合が53.7%（全国比-7.4）で、平成20年度から徐々に高くなってきているものの、依然として中学校との差が大きく、全国平均も下回っている（表3）。

(表3)国語の勉強は好きと答えた児童生徒の割合(%)

		H19	H20	H21	H25	H26	H27
小	三島市	56.5	48.6	51.9	53.1	53.5	53.7
	全国比	-3.2	-7.5	-6.4	-4.8	-5.7	-7.4
中	三島市	58.6	58.6	60.2	58.3	60.6	64.7
	全国比	+1.8	+3.4	+3.5	+0.6	+2.4	+4.2

協力校である錦田小では、学習課題を工夫し、適切な言語活動を位置付けることで、学習意欲を高めることを試み、学校全体で「かく」活動を充実させた国語の授業づくりに取り組んだ。その結果、国語の好きな児童の割合が、平成26年度は46.3%だったのが、平成27年度は58%であった。

このことから、子どもたちが解決したくなるような学習課題を設定し、課題を解決する過程を通して、学びの楽しさを味わえるようにしていくことが、学習意欲を高めることにつながるのではないかと考える。

中学校では、国語が好きな生徒の割合がなぜ高くなるのか、小学校と中学校との関連を研究すると共に、国語に限らず、児童生徒にとって「わかる」「楽しい」授業づくりをめざしていくことが大切だと考える。

授業改善につながる学校への支援をより一層充実していくと共に、今後も家庭学習の啓発や学習・生活習慣の確立を、家庭にも呼びかけていく。

(様式2)

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成27年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名 (推進地域)	静岡県	番号	22
-----------------	-----	----	----

市町村名 (推進地区名)	焼津市
-----------------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

- (1) 焼津市の目指す「子ども同士で学び合い、付けたい力が身に付く『問題解決的な学習』が展開する授業」に向けて、「付けたい力」に沿って効果的な手だてを仕掛けたり、子ども自らが学習内容の理解を確かめる場を設定したりする。
- (2) 学校と家庭、地域が共に手を取り合い、子どもを育てていく「共育(きょういく)」の意識の向上を図る。

2. 研究課題への取組状況

研究課題(1)について

①全国学力・学習状況調査を活用し、児童生徒の学力に関する課題を把握し、授業改善に活かす。

ア. 県の早期対応策に市内全校(小学校13校、中学校9校)参加

児童生徒の実態を早期に把握するとともに、自校の取組についての検証を行い、本年度の校内研修の重点や方向性を点検、確認した。

イ. 市結果検討委員会の設置とまとめの活用

市教委、校長、教頭、教諭の各代表による市結果検討委員会を設置。校種別教科ごとに結果の分析を行い、保護者・地域への公表内容を検討するとともに、分析内容を「教科部会からの提言」「課題分析と授業のポイント」に絞って、端的にまとめた。これらは、「委員会のまとめ」として全校に配布したり、市教育委員会グループウェアに掲載したりして、市内全教員がいつでも閲覧、活用ができる環境を整えた。

また、授業づくりの推進役を担う研修主任、教科・領域研究委員、教頭を対象とした各種研修で、「教科部会からの提言」を取り上げ、ポイントを協議し、提言の示す内容の理解と各校への浸透を図った。

②研修会等の充実を図る。

ア. 市教委主催各種研修会のつながり

研修主任研修会、教科・領域研究委員会等市教委主催の各種研修会は、研修の軸に「市の授業改善の視点」「具体的な取組」を置いて内容を企画し、目指す方法の共通理解を図った。

イ. 市教委学校訪問のつながり

市教委学校訪問の際の指導では、市教委指導主事からの指導、教科・領域研究委員の指導の根拠を「市の授業改善の視点」に置き、統一した指導を行った。訪問校の研修のねらいやこれまでの積み上げを踏まえながら、市の具体的な取組と照らし合わせて価値付けをした。

③協力校を支援し、研究内容を市内各校で共有する。

ア. 県教育委員会サポートチーム派遣及び市教育委員会の校内研修参加

静岡大学大学院村山教授、県教育委員会、静西教育事務所の指導主事による指導を依頼。(5/11・7/1・11/19)「教師と子どもの目標の共有と学びを確認できる振り返り」「学習内容を定着させるための手だて」等、研究の深まりに応じた指導を受けた。

市教委指導主事は、協力校の意向に沿いながら、研究の進め方や指導案内容の吟味等への支援を行った。

イ. 市ホームページの活用及び、市内各校から発表会への参加

市ホームページに、協力校の研究概要を掲載し、広く紹介するとともに、市内各校に研究発表会への参加を依頼した。併せて、参加者には、協力校の研修内容を、自校職員にも伝え、授業づくりに活かすよう依頼した。

研究課題（2）について

①市教育委員会による啓発

ア. 全国学力・学習状況調査結果の公表

調査結果のまとめを「調査結果から見える焼津市の子ども」と題して、市内全児童生徒の保護者へ配布、また、市ホームページにも掲載した。生活習慣や学習環境について、焼津の子どもよさ及び改善点、各教科について伸びが見られる点と着目してほしい改善点を示し、保護者・地域・学校で共に子どもを育てていく「共育」の考え方を訴えた。

イ. 家庭教育リーフレットの活用

市ホームページに、家庭教育リーフレットを掲載。地域に広く紹介するとともに、就学時検診の講演会にて、リーフレットを配布し、講師より、家庭教育が学校生活の基盤となることを伝えた。

また、図書館、公民館等公共機関にポスターを掲示し、合言葉「共育」が多くの方の目に触れるようにした。

②各校との連携による啓発

小学校において、懇談会の材料に、リーフレットを活用。保護者同士で、家庭教育を振り返るきっかけとした。

また、学校が作成する家庭教育の手引等とリーフレットを連動させ、家庭で大切にしてほしいこととして、伝える内容について、統一した。

3. 実践研究の成果の把握・検証

【成果】

研究課題（1）について

①全国学力・学習状況調査結果

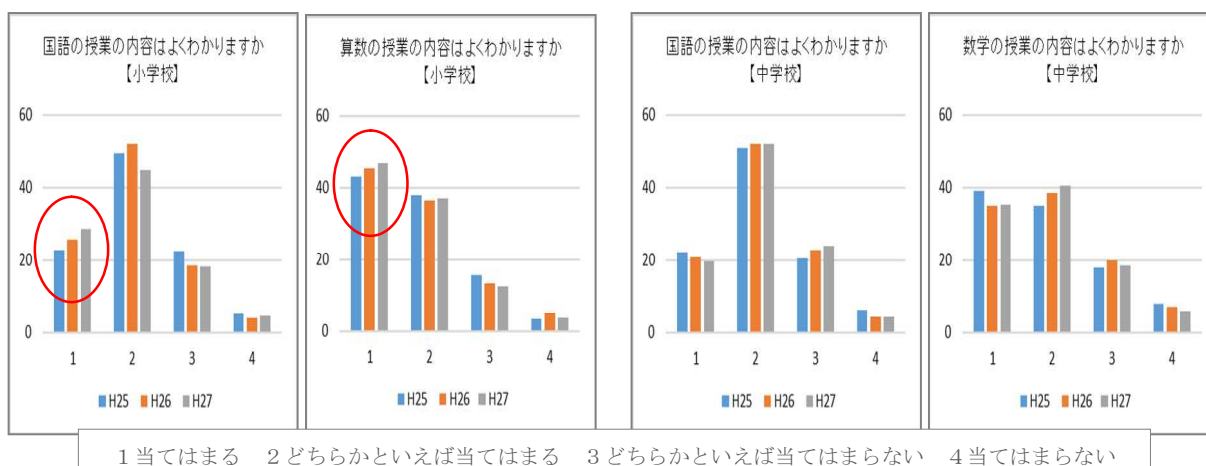
ア. 平均正答率が全国平均を上回った

平均正答率について、全国と焼津市の結果を比較すると、以下のような結果が得られた。

小学校	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	中学校	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B
H25	-6.4	-3.6	-1.8	-3.1	H25	-0.5	-2.1	-1.1	0
H26	1.8	2.4	1.9	1.9	H26	0.5	-1	1.8	3.3
H27	3.1	3.6	2.1	2.1	H27	-0.5	0.1	-0.3	1.9

小学校では、国語 A・B、算数 A・B すべてについて上回った。中学校では、数学については上回ったものの、国語はわずかに下回った。

イ. 「わかる」と感じる児童生徒の増加した（小学校）



小学校では、国語・算数ともに「よくわかる」と感じている児童に上昇傾向が見られた。

②授業改善の促進

ア. 「見通し」と「振り返り」を取り入れた授業が構想されるようになった

全国学力・学習状況調査の学校質問紙の回答について、以下のような変化が見られた。

	授業の冒頭で目標（めあて・ねらい）を示す活動を計画的に取り入れましたか			授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れましたか			
	よく行った	どちらかといえば行った	あまり行っていない	よく行った	どちらかといえば行った	あまり行っていない	
H26	6校	13校	3校	H26	7校	12校	3校
H27	12校	9校	1校	H27	11校	9校	2校

目標を示す活動、振り返る活動ともに、「よく行った」と回答した学校が増加。あまり行っていないと回答した学校についても、本年度、校内研修で重点的に取り組んでいる。また、各校研修主任に自校の授業について質問したところ、上記に係る回答として、以下のような記述が見られた。（平成28年2月調査）

「自校の授業について、本年度、どんな改善が見られたと考えていますか。（自由記述）」

「見通し」について

・子どもに見通しをもたせたことで、主体的に学習活動に取り組めるようになってきた。

- ・ゴールの姿を具体的な子どもの姿で考えておくことで、教師も子どもも、ゴールまでの見通しをもって学習を進めることができた。

「振り返り」について

- ・振り返りの仕方や方法、内容などに対する意識が高まってきた。
- ・振り返りの仕方を考えたり、内容を吟味したりするようになった。
- ・「付けるべき力」が付いたかどうかを、授業の「振り返り」で、教師も子どもも評価することができるように単元構想や授業展開を考え、日々の授業を行うことができた。
- ・目標に対する振り返りをすることで、1時間で学んだことを子どもが実感することができた。また、教師も評価に生かすことで、定着の甘い児童に手だてを考えることができた。
- ・授業末、単元末に振り返るだけでなく、どの場面で振り返りを行うことが効果的なのかを考えるようになった。

イ. 手だてを「仕掛ける」という意識の向上

全国・学力学習状況調査の学校質問紙の回答について、以下のような変化が見られた。

各教科等の指導のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置づけましたか			
	よく行った	どちらかといえば行った	あまり行っていない
H26	6校	12校	4校
H27	7校	14校	1校

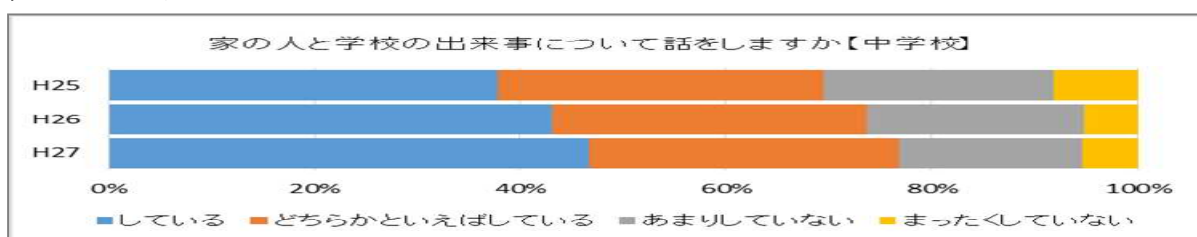
「あまり行っていない」という学校は減少し、行っている学校が増加した。意識の変化は、市教委学校訪問、静西教育事務所定期訪問後の報告にも、「仕掛ける」に係る内容も多いことにも表れている。

市教委学校訪問、静西教育事務所定期訪問後の報告書より抜粋（研修主任、教頭回答）

- ・研修の重点である単元構想の明確化、言語活動の充実が、積み上げられてきたことを確認できた。
- ・どの子もわかる授業にするために、「誰に対してどのような手だてをうっていくのか」を明確にすることで、教材や本時の目標に迫る有効な手立てとなっていく。・活動は目的をはっきりさせることが重要であることを再認識し、生徒にどんな力を付けるのかに立ち返り、授業を組み立てたい。
- ・付けるべき力と設定した目標が妥当なのかを明確にし、その力を付けるための手だてになっているのかを再考していきたい。
- ・仕掛けること再吟味すること、これが一番の課題である。授業中の「指示」や「段取り」ではなく、用意した手だてが「仕掛け」となっていたのかという視点で、各授業者が授業を振り返るように促していきたい。

研究課題（2）について

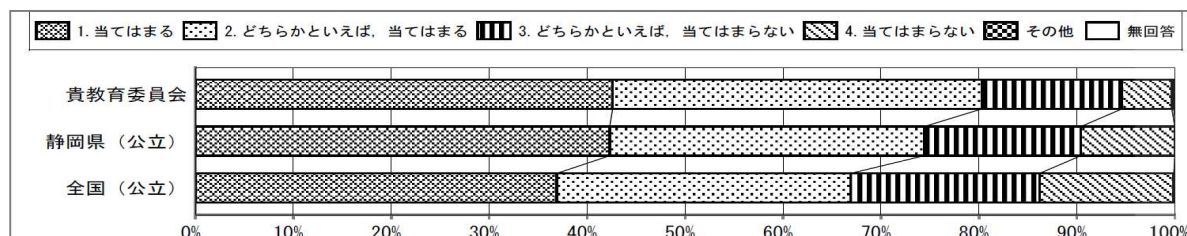
①家庭と「共育」



基本的な生活習慣を身に付けていたり、宿題を欠かさず行ったりするなどは、焼津市のよさとして高い数値が継続している。加えて、「家の人と学校のできごとについて話をする」と感じている児童生徒に増加傾向が見られた。

②地域と「共育」

以下は、「今、住んでいる地域の行事に参加している」児童の割合である。（全国学力・学習状況調査児童質問紙）この質問に対しては、毎年、参加すると答える児童生徒が多い。地域で子どもを見守り、育てていこうとするのは、焼津市のよさでもある。



近所の人や知り合いの人に挨拶をしている (H27.9 焼津市生活や学習に対するアンケート結果)	
小学校	91.8%
中学校	92.2%

一方、近所の人や知り合いの人に挨拶をする児童生徒も90%を超えている。地域とのつながりを示す結果と考える。

【成果に対する考察】

成果につながった要因は、以下の4つと考える。

①授業改善の方向性が浸透したこと

- ・ 県教委から示された「授業改善の重点」にある「押さえる」「仕掛ける」「確かめる」について、市の「授業改善の視点」では、「授業の入口と出口」と強調して示した。また、具体的な取組として、「手だての精選」を打ち出した。こうして授業改善の方向性を明確に示すことで、求められる授業づくりが各校に浸透し、市内の校内研修の取組が揃い、共通の土台で授業の検討ができるようになった。
- ・ 全国・学力学習状況調査の「市結果検討委員会のまとめ（各教科部からの提言）」で、各教科の授業で大切にしたいこと、力を入れて指導したいことを具体的に示したため、調査結果が授業づくりに活用されていった。

②指導を統一したこと

- ・ 教科・領域研究委員が指導をする際には、「市の授業改善の視点」を根拠にするよう依頼したことにより、市教委指導主事だけでなく、多くの指導者が同じ視点で指導することになり、改善のポイントが絞られていった。
- ・ 研修主任研修会の研修内容について、授業づくりリーダーとしての力量の向上に重きを置いたことにより、研修主任が各校の授業について、具体的に指導ができた。

第1回～第3回の研修主任研修会の内容は授業改善を進めていく上で有効であったか				
	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	思わない
H26	65.9%	35.2%	1.1%	0%
H27	86.4%	35.2%	0%	0%

第3回研修主任研修会（12月15日実施）

内容「学習指導案の各項目について記載する目的と、項目間の関係性について考えることで、授業を構造的に捉え直す。」

参加者感想

- ・そもそも、何のために書くのかは意外と考えないことであり、問い直す上でよい機会だった。授業案作成の意味を校内でしっかり伝えたい。
- ・指導案になぜその項目を書くのか、リーダーとして目的をしっかりと押さえておくことが大切であると改めて感じた。

③実践を共有したこと

- ・協力校和田小学校が、「学ぶことを子どもと教師が共有する」「ねらいに沿った振り返り」に重点を絞り、指導案の表記にも、実際の授業でも、取組内容がわかるように努めたことで、市内各校にも協力校の意図が伝わり、研究成果を共有することができた。
- ・市教委においては、和田小学校の指導案等の具体を研修会等で積極的に活用した。協力校の研究内容のよさが浸透するとともに、それぞれの学校が、自校の取組を明確にしていくことができた。

④情報を発信したこと

- ・全国学力・学習状況調査結果、結果検討委員会のまとめ、家庭教育リーフレット、協力校の研究内容を、様々な方法で情報発信したことで、教師の意識はもちろん、保護者・地域への働きかけとなった。

4. 今後の課題

研究課題（1）について

平成27年度「授業改善の重点」

子ども同士で学び合い、付けた力が身に付く「問題解決的な学習」が展開する授業づくり

【☆☆：焼津市と静岡県との比較で表してあります】
 ☆☆☆：大変高い ☆☆：高い ☆：やや高い 〇：同じ
 ★☆☆：やや低い ★★：低い ★★☆☆：大変低い

小学校	中学校
<p>1 学習指導要領の目標や内容、指導事項や共通事項にもとづき、「付けた力」を押さえる。 【単元構想】 ・「付けた力」にもとづき、「単元の目標」を子どもと共有し具体的に示す。 ・子どもにとって魅力的で、単元の学習が見通せる単元構想を工夫する。</p> <p>2 付けた力に自ら主体的な手段で責任を担う。 ・目標にもとづき、手段や支援を精選する。 【学習課題】＝教師からの提示・教師が学びたいもの 単元のねらい（教材の本質）を踏まえた子どもにとって魅力的な教材 【学習問題】＝子どもの心に成立・子どもの側からわき上がってくる 子どもが本気になって追究したいもの 【問題解決】 ↓ （個別学習） 子ども同士が自力で解決方法を見つけ、自分の考えを活動で位置付ける。 【学びの入口】 子ども同士が思いや考えを交流させ、自分たちで問題を解決させる。 ・主体的な学び合いのために交流する目的が明確であること ・思いや考えに根拠があること</p> <p>3 子ども自身が学習内容の理解を確かめる場を設定する。 ・目標にもとづき、「教科言語を使って」「キーワードを」 「文字数や時間を制限して」等の条件を付与して書く。 【学びの出口】 ・「単元で付けた力」にもとづいた振り返りをする。自分の学びを系統的にとらえさせる。</p> <p>子どもを丁寧に見取る。 ・よさや可能性を見取る。 ・付けた力や根拠を捉え見取る。 ・頼りや支援を充実させる。 ・学びを継続的に見取る。</p>	<p>1 学習指導要領の目標や内容、指導事項や共通事項にもとづき、「付けた力」を押さえる。 【単元構想】 ・「付けた力」にもとづき、「単元の目標」を子どもと共有し具体的に示す。 ・子どもにとって魅力的で、単元の学習が見通せる単元構想を工夫する。</p> <p>2 付けた力に自ら主体的な手段で責任を担う。 ・目標にもとづき、手段や支援を精選する。 【学習課題】＝教師からの提示・教師が学びたいもの 単元のねらい（教材の本質）を踏まえた子どもにとって魅力的な教材 【学習問題】＝子どもの心に成立・子どもの側からわき上がってくる 子どもが本気になって追究したいもの 【問題解決】 ↓ （個別学習） 子ども同士が自力で解決方法を見つけ、自分の考えを活動で位置付ける。 【学びの入口】 子ども同士が思いや考えを交流させ、自分たちで問題を解決させる。 ・主体的な学び合いのために交流する目的が明確であること ・思いや考えに根拠があること</p> <p>3 子ども自身が学習内容の理解を確かめる場を設定する。 ・目標にもとづき、「教科言語を使って」「キーワードを」 「文字数や時間を制限して」等の条件を付与して書く。 【学びの出口】 ・「単元で付けた力」にもとづいた振り返りをする。自分の学びを系統的にとらえさせる。</p> <p>子どもを丁寧に見取る。 ・よさや可能性を見取る。 ・付けた力や根拠を捉え見取る。 ・頼りや支援を充実させる。 ・学びを継続的に見取る。</p>
<p>【児童生徒質問紙】と「学校質問紙」の結果より① C：児童生徒質問紙 T：学校質問紙 (数字は質問番号)</p> <p>C11 授業のねらいに目標（めあて・ねらい）が示されていたと思う☆☆☆ T29 授業の冒頭で目標（めあて・ねらい）を示す活動を計画的に取り入れた☆☆</p> <p>T31 各教科のねらいを明確にした上で言語活動を適切に位置づけた☆☆☆ T40 自分で調べたことや考えたことをわかりやすく文章に書かせる指導をした☆☆</p> <p>C：7 及連の前で自分の考えや意見を発表することは得意☆☆ C38 自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う★ T33 発言や活動の時間を確保して授業を進めたが☆☆☆</p> <p>C39 学校の友達との間で話し合う活動をよく行っていたが★ T35 学級やグループで話し合う活動を授業などで行ったが☆☆☆</p> <p>C42 授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていた☆☆☆ C43 ノートに学習の目標（めあて・ねらい）とまめを書いていたと思う☆☆☆ T30 授業の最後に学習内容を振り返る活動を計画的に取り入れている☆☆☆</p> <p>C：6 自分にはよいところがある☆ T43 一人一人のよい点や可能性を見つけ児童に伝えるなど積極的に評価した☆☆</p>	<p>C11 授業のねらいに目標（めあて・ねらい）が示されていたと思う☆☆☆ T29 授業の冒頭で目標（めあて・ねらい）を示す活動を計画的に取り入れた☆☆☆</p> <p>T31 各教科のねらいを明確にした上で言語活動を適切に位置づけた☆☆☆ T40 自分で調べたことや考えたことをわかりやすく文章に書かせる指導をした☆☆</p> <p>C：7 及連の前で自分の考えや意見を発表することは得意☆☆☆☆ C38 自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う☆☆☆☆ T33 発言や活動の時間を確保して授業を進めたが☆☆☆</p> <p>C39 学校の友達との間で話し合う活動をよく行っていたが☆☆☆ T35 学級やグループで話し合う活動を授業などで行ったが☆☆☆</p> <p>C42 授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていた☆☆☆☆ C43 ノートに学習の目標（めあて・ねらい）とまめを書いていたと思う☆☆☆☆ T30 授業の最後に学習内容を振り返る活動を計画的に取り入れている☆☆☆☆</p> <p>C：6 自分にはよいところがある☆☆☆ T43 一人一人のよい点や可能性を見つけ児童に伝えるなど積極的に評価した☆☆☆</p>

〇「授業の冒頭で目標（めあて・ねらい）を示す活動を計画的に取り入れた」学校は、小・中とも、昨年度より増加しました。（T）
 ○特に小学校は、県と比べても意識が高いです。（T）
 ◆一方、「目標（めあて・ねらい）が示されていた」と感じている児童生徒は、県と比べて少ないです。（C）児童生徒と教師の間に意識の差があることから、学習課題の提示等に工夫が求められます。

◆「自分の考えや意見を発表することが得意」と感じている児童生徒が、県と比べて多いです。（C）
 ○「学級やグループで話し合う活動を行った」学校が小・中ともに県よりも多いです。（T）子ども一人一人が自分の思いや考えを話す場を意図的に設定していることが児童生徒の「得意」という意識につながっていると思われる。

◆一方、児童生徒は、発言したり話し合ったりする場に対する意識が低いです。（C）子どもが主体的に学び合うために、どんな目的、何を話すのかを事前に話し合わせる必要があります。

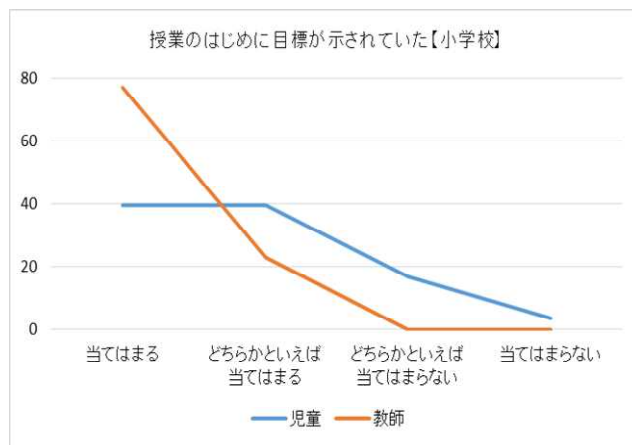
◆「学びの出口」において、学習内容について振り返る活動を取り入れ、目標（めあて・ねらい）が達成できたかを確かめることについては、今後の課題です。（T）

〇その子のよさや可能性に目を向けて、積極的に伝え、

焼津市結果検討委員会まとめより

市の「授業改善の重点」に沿って、児童生徒質問紙と学校質問紙の結果（H27 調査）をまとめた。

「授業の冒頭で目標（めあて・ねらい）を示す活動を計画的に取り入れた」と回答した学校が増加し、特に、小学校においては、県と比べても意識が高い。だが、「目標（めあて・ねらい）が示されていた」と感じている児童生徒は、県と比べて少ない傾向にある。

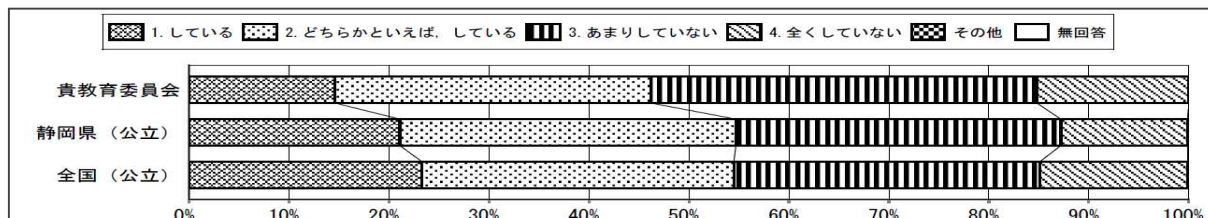


また、「学級やグループで話し合う活動を行った」と回答した学校についても、小中学校ともに県よりも多いのだが、「教師や友達との間で話し合う活動を行っていた」と回答した児童生徒は県と比べて少ない。学校は、「一人一人のよい点や可能性を見つけ、児童生徒に伝えるなど、積極的に評価した」としているのに、児童生徒の「自分にはよいところがある」という回答には反映していない。

教師の意識と児童生徒の意識に、「ずれ」がある。つまり、現状では、教師の意図していることが児童生徒に伝わっていないという場合も考えられる。

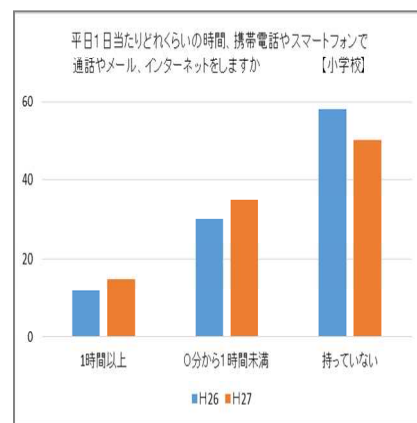
子どもが「学びの実感」を積み重ねていくためには、子どもが学びの見通しをもち、自らの学びの過程を客観的に捉えることが必要になる。そのために、この「ずれ」に目を向けていくのが、今後の課題と考える。

研究課題（2）について



上記は、児童質問紙「学校の授業の予習をしていますか」（H27）の回答結果であり、下右記は、「平日1日当たり、どれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをしますか」（H27）の回答結果である。予習に関しては、県や全国の結果に比べ、している児童が少なく、携帯電話やメール、インターネットの利用時間については平成26年度に比べ、増加している。

「決められたことや与えられたことをやりきる力」に係るような質問は、高い傾向が見られる一方で、「自分で生活を創っていく力」に係るような質問については、ここ数年、低い傾向があり、焼津市児童生徒の課題である。保護者・地域と、焼津市小中学校が、「豊かな心をもち、自ら生き生きと活動する子どもの育成」を目指していること、その具体的な姿を保護者・地域と共有していくことが、今後、必要と考える。



「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」
 平成27年度委託事業完了報告書
 【協力校】

都道府県名 (推進地域)	静岡	番号	22
-----------------	----	----	----

協力校名	静岡県三島市立錦田小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 協力校における学力に関する課題

平成26年度の全国学力・学習状況調査（6年生）と標準学力調査（1～5年生）の結果から、以下のような点について課題ととらえている。

〈学力調査の概況〉

- ・ 総じて平均値では、全国に及ばない。また、低学年に比較して中学年で差が大きいものの、高学年で持ち直している。
- ・ 学年を追う毎に、分布が低得点層に広がっていき、中央値も低下していく。この傾向は、国語科がより顕著で、算数科では高得点層が維持している様子が見える。このことから、個別の学力分析（プロフィール）をもとに、学習課題の持たせ方や遂行力に配慮する必要があると考える。

〈質問紙調査の概要〉

- ・ 2年生から5年生の質問紙調査では、大項目「自己認識」「社会性」「学級環境」「生活・学習習慣」及び各下位項目において、比較的自己評価が高い。「自己肯定感」と「学級適応感」、「クラスの言葉の力」と「規律と他者尊重」、「学級の絆」についても高い相関を示し、基本的に「愛されている」「落ち着いた学校生活を送っている」と感じている子どもが予想よりも多かった。

〈学力調査と質問紙調査のクロス集計の概要〉

- ・ 「教科学力」と「生活・学習習慣」、「教科学力」と「自己肯定感」の相関については、学力の分布が開いた割には自己評価が低くない。楽観的で向上する意欲を持っているという見方と、現状で満足して改善する方向性が見えていないとも言える。このことは、「勉強は大切」と思いながら「十分にしている」という6年生児童質問紙にも繋がる。
- ・ 授業に関することでは、「5年生までに受けた授業のはじめに、目標が示されていたと思いますか」「国語(算数)の勉強は好きですか」というような項目で評価が低く、教員の授業改善によって何れの項目でも児童の学習への課題意識や満足度が高まり、自ら学ぶ姿勢に繋がると期待している。

2. 協力校としての取組状況

① 課題を解決するために実施した学習状況の改善の取組

(1) 平成27年度も、6年生の全国学力・学習状況調査に加えて、1年生から5年生まで標準学力調査と質問紙調査を実施して、クロス集計や経年変化等の分析を基に課題を明確にする。(資料1及び資料2)

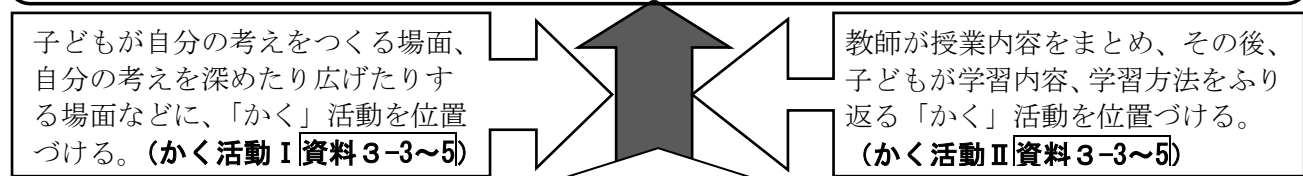
(2) 授業改善の視点の焦点化(資料3)

- ・ 子どもが根拠を持った考えを述べたり、書いたりできないのは、教員が根拠の伴った考えをつくるような学習課題、発問の在り方が吟味できていないことも確認できたので、学習課題の提示

の仕方を、授業改善の視点の一つとする。全学級に導入された電子黒板の活用を図り、その有効性を教員間で共有していく。

- かく(書く)活動に力を入れてきたが「何を書かせるか」という点が統一されていなかったので、子どもが「自分の考えを書く(かく活動Ⅰ)」と「振り返りを書く(かく活動Ⅱ)」とを授業に位置づけ、教員がこれを見届けることで『学ぶ意欲と確かな学力の向上を目指した授業作り』を志向していく。(下図参照)
- 子どもの活動を重視するあまり、つけたい力に迫れない授業になってしまったこともあったので、子どもの活動の保障と教師の出番とのバランスを考えた授業展開を考えていく。また、客観テストだけでは測ることができない学習展開、例えばアクティブラーニングのような学習展開での評価の在り方については、つけたい力と評価方法との連鎖を意識していく。
- 研究構想

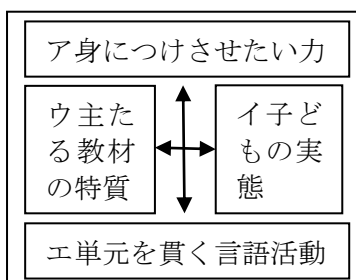
研究主題「学ぶ意欲と確かな学力の向上を目指した授業づくり」
 ～自分の考えや言語表現をつくるための「かく」活動を充実させた国語科の授業づくり～



子どもが「考えたい」「知りたい」「やってみよう」と思い、自分の考えをつくりたくなるような課題を提示する。国語科では、子どもの実態をとらえた単元を貫く言語活動を位置づける。(資料3-2)

学 習 の 基 盤	<ul style="list-style-type: none"> • 全国学力・学習状況調査実施(6年:4月) • 標準学力調査実施(2~5年:5月、1年:1月) • 定着度調査実施(1~6年:1月) • 家庭学習の啓発(毎週金曜日のお茶の間読書、「家庭学習のすすめ」の配布) • 総合質問紙調査(1~5年、6年はQ-U)を通して、生き辛さ・学び難さを抱える子を支援。
-----------------------	---

- 子どもが主体的に学ぶための単元構想⇔4つの結びつきを学習指導案に盛り込む。(資料3-1)



- ア 身につけさせたい力の明確化
指導事項との関連を踏まえて
- イ 子どもの実態のとらえ
既習事項までの学びと客観的データを踏まえて
- ウ 主たる教材の特質を分析
教材の価値、効果を踏まえて
- エ 単元を貫く言語活動の設定
子どもの意欲をかきたて、価値ある言語活動を構想

- 学年部を中心とした研修をもとに、各単元の目標・内容・指導方法・評価を一体と考えた教材研究を進めていく。日常的に児童を語り、授業を語る教員文化が醸成されるように心がける。

② 課題を解決するために実施した生活状況の改善の取組

(1) 家庭学習の啓発(資料4)

- 引き続き自己課題を持ち計画的に学習を進める子をめざして、家庭学習の啓発を行っていく。計画的に時間を活用する習慣と、予習型・復習型・自主型の学習の進め方を育成していく。
- 読書活動については、個々の読書傾向への配慮は不可欠ではあるが、読書時間や習慣の拡大に繋がるような良書の紹介や、学習と関連した並行読書の励行など進めていく。

(2) 個々の学びを保障する指導体制の充実

- 学力向上の基盤となる学級経営の一環として、いじめ・不登校・問題行動を始め「困り感」を抱えている子どもへの学習支援や生活支援、授業中でのユニバーサルデザイン等を工夫する。

3. 取組の成果の把握・検証

① 学習状況の改善について

(1) 中間評価(平成27年度全国学力・学習状況調査、平成27年度標準学力調査・総合質問紙調査)

- 特に研修の重点として位置づけた「かくこと」においては、記述式の設定問の正答率が上が

り、各学年の学力調査結果の向上に繋がっていることが実感できた。さらに学年に応じた取組を一層発展していくことが期待された。

- ・ 学年進行と共に得点分布に広がりが生じており、個別の課題を踏まえた上で「できる・分かる」授業を模索することが、一層必要となった。
- ・ どの学年でも比較的「自己肯定感」が高いことを強みとし、それぞれの居場所がある学級作りと個別の相談活動を継続し、引き続き「生き辛さ」「学び難さ」を軽減する取組を進めることにした。

(2) 研究発表会の成果(資料5)

- ・ 児童のあらわれについては、評価が高かった。
- ・ 児童の実態に基づいた研究の進め方について、評価が得られた。特に、単元構想と「かく活動Ⅰ・Ⅱ」。
- ・ 1学年1単元全学級の公開については、単元全体の見通しは持てるとの評価もあったが、特定の授業に焦点化できなかったという指摘もあった。
- ・ 分散会については、意見を交わせたことで満足度が高かった。

(3) 静岡県定着度調査(国語科、算数科)

- ・ 1月に実施した定着度調査では、従来弱みとしていた国語科の長文読解と記述式に解答する設問の正答率が向上した。また、算数科においても、考え方を説明する問題の正答率が向上している。研修の成果が出ていると受け止めることができた。
- ・ 全体的には向上が認められるが得点分布は広がっており、学力差(個人内差、個人間差)に対する対応が求められている。

(4) 学習状況に係る学校評価アンケート項目の結果は、次の通りである。(％は「そう思う」と「だいたいそう思う」の割合の合計、㉕は25年度、㉗は27年度)

ア 児童評価項目については、特に「授業の内容がよく分かり、目標を達成しているか」という項目は下がっている。学力を示す数値そのものは向上しつつあるので、それを「よし」と思い更なる向上を目指そうとする姿勢が、評価を厳しくしているのととらえをしている。

- ・ めあてを持って学習しているか ㉕78% ⇒ ㉗79%
- ・ 先生や友達の話聞いて学習しているか ㉕87% ⇒ ㉗87%
- ・ 授業の内容がよく分かり、目標を達成しているか ㉕89% ⇒ ㉗75%

イ 保護者評価については、僅かながら数値が上がっている。学校の学習に取り組む姿勢については、なお一層の信頼感を得たいところではあるが概ね肯定的であるととらえている。

- ・ めあてを持って学び続ける子に育っているか ㉕64% ⇒ ㉗70%
- ・ 我が子は、しっかり授業を受けているか ㉕82% ⇒ ㉗83%
- ・ 先生は工夫して授業を行っているか ㉕82% ⇒ ㉗84%

ウ 教職員評価については、指定研究を受けて実践的な研修を進めているため、自己評価は高い。ただし、教員の自己満足と言われないよう一層の研鑽が必要であると考えている。

- ・ めあてを持って学び続ける子に育っているか ㉕62% ⇒ ㉗85%
- ・ 子ども達は、しっかり授業を受けているか ㉕88% ⇒ ㉗99%
- ・ 自分は、学力定着に向けた授業実践に努めているか ㉕80% ⇒ ㉗99%

(5) 校内研修の教職員評価

- ・ 教員は、国語科の授業で「かく活動Ⅰ」「かく活動Ⅱ」を行うことが学力定着に繋がることを認識できた。国語科のみならず、他教科でも同様な取組が始まっている。
- ・ 校内研修に対する教員の満足度は高く、基本的には今年度研修の成果を踏まえて来年度も実践を重ねていくことになった。特に、研究授業後の協議を、少人数によるアクティブラーニング型研修と全体への共有との2段階を心がけたことにより、意見を寄せられる・意見を聞かして貰えることで活発な意見交換の場になった。
- ・ 学年内で時間を生み出して教材研究をしたり、先行する学級担任が後発の学級担任にアドバイスをしたり、児童の表れを情報交換したりするなど実質的な研修ができた。
- ・ 授業の公開については全員が行うことで抵抗感がなくなり、今年度最後の公開では、担当学年で相談し、2学級が指導段階を別にして公開した。
- ・ 全体研修は、以下の通りである。折に触れて、三島市教育委員会・静東教育事務所・静岡県教育委員会からのサポートを受けた。特に、研究発表会では静岡県学力向上推進協議会会長により本校研究の価値付けをしていただき、本校教員はより一層の達成感を得ることができた。

月 日	内 容
4月10日	全体研修① 本年度の方針、学習指導案形式、学年の実態・目指す姿・手立て
5月 1日	全体研修② 全国学力・学習状況調査自校状況把握（解答用紙サンプル提供）
5月11日	全体研修③ 研究授業①（3年）
6月12日	全体研修④ 研究授業②③（2・6年）※サポートチーム①（兼、定期訪問）
7月10日	全体研修⑤ 研究授業④⑤（1・4年）
7月29日	全体研修⑥～⑩ 7月までのまとめ、研究発表会に向けて（含、サポートチーム②）
11月12日	研究発表会（学年1単元、全19学級公開） ※村山教授の講話、地域支援課の講評
12月11日	全体研修⑫ 発表会参加者からの指摘事項、成果と課題をもとに修正実践
1月 7日	全体研修⑬ 定着度調査の結果検討
2月 8日	全体研修⑭ 研究授業⑥（5年） ※サポートチーム③
2月29日	全体研修⑮ 今年度の成果と課題、平成28年度の提案

② 生活状況の改善について

(1) 家庭学習

家庭学習に係る学校評価アンケート項目の結果は、以下の通りである。教員の啓発活動に対する自己評価は高いが、児童・保護者の評価は向上しているとは言えない。今後は、児童自身と保護者が「よし」と思えるレベルを発信していく必要があると考えている。

- ・ 児童：家で学習する習慣がついているか ⑤78% ⇒ ⑦74%
- ・ 保護者：我が子は、家庭学習の習慣がついているか ⑤67% ⇒ ⑦69%
- ・ 教員：家庭学習の習慣がつくよう子ども達や保護者を啓発したか ⑤66% ⇒ ⑦92%

(2) 読書活動

読書については、以下のような取組を通して個々の生活時間の中で読書時間や読書習慣を拡大するように働きかけた。一部の読書好きだけでなく、どの児童もまんべんなく本を手にすることを促すことで、目標としていた全校平均週一冊以上を達成している。

- ・ 教員は、学習活動と関連づけて並行読書を進めたり、学年毎に「おすすめの本50冊（資料6）」を決めて勧めたりした。
- ・ 春・秋の読書旬間に朝読書の時間を設け、全校の集会や昼の放送などを通して本に興味を持つ企画を進めた。多読やおすすめの本完読は、賞揚の機会とした。
- ・ 図書委員会では、担当の司書教諭や図書館司書を中心に、児童自身が読み聞かせをしたり、本に関心を持つ企画を展開したりして、読書への関心を高めた。
- ・ P T A活動の一環として、図書室経営に参画する図書ボランティアと月一回の読み聞かせを行う読み聞かせボランティアを募り、継続的に活動してくれた。
- ・ 蔵書の充実のために市費のみならずバザーなどのP T A会計からも良書の購入を図った。

4. 今後の課題

- (1) 児童の学力定着については、今後とも様々な方法で検証していく。特に、中・長期の評価が不可欠である。ただし、「授業の内容がよく分かり目標を達成している」と答える児童が全体の3/4ほどであり、児童にとっても達成感が得られる（自らの頑張りを正當に評価できる）手立てを講じていく必要がある。さらに、平成28年度も、6年生に加えて他学年も学力調査を実施することにした。
- (2) 家庭学習の望ましいあり方については、引き続き各種コンテンツを用いて啓発していく。特に、時間の使い方については個人の生活に介入していくことになるが、調査結果等をもとに公正な指導を心がける。また、低学年段階で全員が同一課題（宿題）を行うことから、学年が進むにつれて予習型・復習型の家庭学習や自己課題を追究する自主学習型への移行ができるよう支援していく。
- (3) 「生き辛さ」「学び難さ」を感じて授業に参加できなかつたり、授業が分からなかつたり、課題を遂行できなかつたりする児童は多い。多くの児童の学力向上が認められる中で、むしろ、こうした児童との差は広がっているとも言える。個々の児童に配慮した「ユニバーサルデザインの授業」を展開すると共に、個々の「生き辛さ」「学び難さ」を軽減するための相談活動の充実や個別指導を引き続き展開していく。

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
 平成27年度委託事業完了報告書
 【協力校】

都道府県名 (推進地域)	静岡県	番号	22
-----------------	-----	----	----

協力校名	静岡県 焼津市立和田小学校
------	---------------

1 協力校における学力に関する課題

本校は、98%の子供たちが学校が楽しいと答えている。(H26,12「わかしおっ子の振り返り」)しかし、全国学力・学習状況調査の結果から次のような課題が明らかになってきた。学力は、平成26年度の全国学力・学習状況調査では、正答率が国語A 69.4% (全国比-3.5%) 国語B 52.1% (-3.4%) 算数A 77.7% (-0.4%) 算数B 53.5% (-4.7%) と全てにおいて全国を下回った。また、学習意欲は、「授業が楽しい94%」であるにもかかわらず、「授業の内容がわかる(国語56%) (算数62%)」「家で計画を立てて学習を行う37%」が低く、意欲が「主体的に学習に取り組む」という学習の意欲へとつながっていないことがわかる。

一方、教師は、「付けたい力」が明確でなかったことや学習の目標の共有化や振り返りの内容が十分でなかったことを課題として挙げている。

また、本校は全児童の約1割が外国籍児童(フィリピン、ブラジル、ペルー、インドネシア)であり、国籍は日本だが日本語ができない家庭もある。さらに学区の児童養護施設から通学する子供も在籍しており、学習だけでなく、生活指導に支援が必要な子供は多い。そこで、保護者や地域との連携を深めることで、基本的な生活習慣の定着や規範意識の向上、学力向上に向けての家庭学習の充実が検討課題となっている。

2 協力校としての取組状況

研究主題

「チーム和田」で取り組む「和田の授業づくり」に向けて
 ～「付けるべき力」が身に付く授業の創造～
 ・「午前5時間制」の導入・「合言葉は『共育』」の推進・学びを支える環境作り

研究目的

本校の経営の重点は以下の通りである。

- | | | |
|---|---|-------|
| <ul style="list-style-type: none"> ・人間尊重の精神を基盤とする ・生徒指導が機能(存在感・関わり・自己決定)する ・授業を真ん中(教材研究・授業準備・児童理解)に据えた | } | 学校づくり |
|---|---|-------|

研究方法

テーマの具現には、「静岡県の子どもの学力向上のための提言」をもとに研究を進めることとした。

静岡県の子どもの学力向上のための提言

- 1 学習指導要領が求める学力をより明確にして、授業改善に努めます。
- 2 教員の指導力向上に努めます。
- 3 「全国学力・学習状況調査」の問題や結果を活用します。
- 4 子どもが主体的に家庭学習に取り組む環境を大切にします。
- 5 子どもの学びを支える取組を支援します。

平成25年11月11日 静岡県・政令市・市町教育委員会代表者会

- 「1 学習指導要領が求める学力をより明確にして、授業改善に努めます。」について
「付けたい力」を「付けるべき力」と位置づけ、「深め合う子」をテーマに付けるべき力が身に付く授業を創造（授業改善）する。
- 「2 教員の指導力向上に努めます。」について
「午前5時間制」を導入することで、「和田の授業づくり（教材研究・授業準備・児童理解）」の時間を確保する。
- 「3 「全国学力・学習状況調査」の問題や結果を活用します。」について
全国学力・学習状況調査の結果を活用して、教育改善を行う。
- 「4 子どもが主体的に家庭学習に取り組む環境を大切にします。」について
保護者や地域との連携を深めることで基本的な生活習慣や規範意識の定着、学力向上にむけて家庭学習の充実をめざす。
- 「5 子どもの学びを支える取組を支援します。」については、
日本語指導の必要な外国籍児童等に対する支援や読書活動、言語環境の充実に取り組む。

研究経過

(1) 「付けるべき力」が身に付く授業の創造

① 研究仮説の設定

研修テーマ「深め合う子～子供自ら動き出す授業～」は、国語科においては、目的に応じて文章を読んだり、条件に従って文章を書いたりする力を付け、算数科においては根拠をもとにした理由を説明したり、筋道を立てて考えたことを説明したりする力を付けることにより具現されると考えた。その際、各単元の付けたい力を明確にした単元構想が必要になる。つまり、「付けたい力を押さえる」、「学びの充実のために教師が仕掛ける」、「子供の学びを確かめる」ことが不可欠である。さらに、「学習指導要領における付けたい力」を強い思いを持って「付けるべき力」とした。

〈「付けるべき力」が身に付く授業の創造＝研究仮説〉

単元で付けるべき力を明確にし、目標に至る見通しをはっきりさせて単元を構想すれば、子供は自ら考えたり働きかけたりして、子供の思考に沿った授業が成立し、自分の思いや考えを深めていくことができるだろう。

② 平成 26 年度の実践

国語を研究教科として、「付けるべき力」を明確にした単元構想づくりに取り組んだ。

5 年国語「大造じいさんとがん」(1/11~7/11)

4 単元構想 (1 時間扱い 本時は第 9 時)	言語	留意点	学習活動	言語	留意点
<p>第 1 次(導入)見通しをもつ</p> <p>① 椋鳩十さんについてのブックトークを聞く。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">片耳の犬シカ 犬シカは、なぜ「片耳」なんだと思う?</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">金色の足あと キツネの足跡は、なぜ金色なのかあ...</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">森の王者 先生は、この本を読んで涙が出てしまった。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">アルプスの猛犬 動物が、人間のために命をかけるってすごい。</div> </div> <p>○椋鳩十さんは…</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">・長野県生まれ、鹿児島で過ごした小説家。 ・子ども向けに、多くの動物作品を書いているよ。 ・学校の先生や、図書館の館長さんをしていただよ。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">・僕も動物が好きだから、読むのが楽しみなな。 ・先生が紹介してくれた本の結末が気になるな。 ・感動しそうな話がたくさんありそうだから楽しみなな。</div> </div> <p>「大造じいさんとがん」や、椋鳩十さんの他の作品を読み、ぐっときた場面や登場人物の心情が伝わる表現について、自分の考えをまとめよう。</p> <p>② 学習計画を立てよう。</p> <p>○「大造じいさんとがん」や自分が選んだ本で読みとったことを、「本のショーウィンドウ」にまとめよう。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">・先生は「ごんごつね」でつくったんだね。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">・すごい！私も早くつくってみたいなあ。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">・でも難しそう。ないと思う。</div> </div> <p>どんなことを学べば、ショーウィンドウにまとめることができるだろう。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">・あらすじを書いたために、何が起こったのかを順番に読んでいくよ。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">・登場人物の気持ちや行動がどう変わったのかを読みとりたい。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">・色とか景色、天気や、気持ちを表していることに気がついて読みたい。</div> </div> <p>○学ぶこと → 付ける力は</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ぐっとくる場面や、色、景色、天気などの情景描写から、登場人物の関係や心情の変化を読みとる力</div>	<p>お気に入りの椋鳩十さんの作品の魅力や、「本のショーウィンドウ」にまとめよう。</p>	<p>・児童が作品に興味を持ち、読んでみたいと思うようなブックトークや作者紹介をして、様作品への関心をもつ。</p> <p>・第 4 時からお気に入りの作品(一冊)を使用するため、第 1 次を早め実施して並行読書を開始していく。</p> <p>・読み終わった様作品について読書カードにまとめ、自分の一冊を選択するときの材料になるようにしておく。</p>	<p>第 2 次(展開)「大造じいさんとがん」で読む</p> <p>③④登場人物と、物語のあらすじをおさえよう。</p> <p>③「大造じいさんとがん」は、 どんなお話かな。 3 年間の残雪をどうしていたか、最後に気持ちがかわる。物語だよ。</p> <p>④選んだ本で、あらすじをまとめよう。</p> <p>(読みの視点) ・登場人物はどんな人物か、どんなことが起こったか。 ・山場や何が起り、主人公の心情がどのように変わったか。</p> <p>(まとめ方) ・登場人物は必ず入れる。 ・山場での変化や物語の結末を明かしたくない場合は、ここに書かなくてもよい。</p> <p>⑤⑥⑦自分の心にぐっときた場面をみつけよう。</p> <p>⑤⑥自分が、ぐっときた場面はどこだろう。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">・残雪がおとりのがんと戦う場面は、とてもかっこいい。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">・大造じいさんがおりのふたを開けて、残雪を見送る場面はぐっときた。</div> </div> <p>なぜ「かっこいい」「ぐっときた」の?</p> <p>○本文中から、「その理由となる言葉」や「登場人物の心情の変化」を見つけよう。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">「散々ねばならぬ仲間のおがた」「力いっぱい」「白い花弁」</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">「前はいまましかつたのに、「がんの英雄よ」と言っている。</div> </div> <p>○登場人物の行動、会話、心情の変化や場面の様子や言葉等を本文の中から探して、ぐっときた場面について自分の考えをまとめよう。</p>	<p>お気に入りの椋鳩十さんの作品の魅力や、「本のショーウィンドウ」にまとめよう。</p>	<p>表面</p> <p>・山場については既習だが、あらすじには欠かせない部分であるため、ここで再度確認をする。</p> <p>・ノートを見開きで使用し、右ページには「大造じいさんとがん」、左ページには選んだ本で読みとったことをまとめる。</p> <p>・第 4 時の前に並行読書材の中から自分が読み進めていく一冊を決める。</p> <p>裏</p> <p>・第 5・6 時では、同じ場面を選んだ児童で交流をし、友達の見取りを入れながら自分の考えを深める。</p> <p>・第 7 時では、貼りためておいた付箋をもとに、ぐっときた場面について考えをまとめる。</p> <p>・理由がはっきりしない児童には、本文の叙述をもとに、人物関係の変化に着目するような助言をしていく。</p>

単元を貫く言語活動として「本のショーウィンドウ」を位置づけ、各パーツを指導事項と結び付けることで「優れた叙述を主体的に読むこと」につなげることができた。ショーウィンドウにまとめることが「付けるべき力」をつける共に子供が学びの見通しを持たれたからである。そして、この単元では、「こんな国語の授業をまたやりたい。」という子供たちの声を聞くことができた。

平成 26 年度の主な言語活動例 (国語科)

- 1 年 りものものずかんを作ろう「はたらくじどう車」
- 2 年 繰り返しの続き話を作ろう「きつねのおきゃくさま」
- 3 年 登場人物の 1 人になって、あなぐまさんに手紙を書こう
「わすれられないおくりもの」
- 4 年 和田の自慢を紹介しよう「学級新聞をつくろう」
- 5 年 新 5 年生におすすめしたい本の帯を創ろう「雪わたり」
- 6 年 日常生活の中で、ふっと感じたことを伝えよう
「随筆を書こう」



「登場人物のしたこと」から、登場人物の性格や気持ちを考えながら読み、キャラクターカードを作ろう (2 年)

③ 平成 27 年度の実践

平成 27 年度は、研究教科に算数科を加えた。さらに 1 時間 1 時間の「付けるべき力」に目を向け、研究仮説を受けて次の 2 つの重点を設定した。

重点 1・・・この授業で学ぶことを共有

付けるべき力を明確にし、授業のはじめに、この授業で学ぶことを子供と教師が共有し、明示することで、全員がはっきりと何を学ぶのか、何をしたらよいかのかわかり、学習意欲をもって授業に臨むことができる。

【学習意欲の向上】

重点2・・・ねらいに沿った振り返り

学年の発達段階に応じた振り返りについて実践を積み重ねることで、6年間を通して子供自身が何を学び、何がわかったかを実感していけるようにしたい。また、私達は、授業のはじめに子供と共有したこの授業で学ぶことが、本当に学びに適したものであったか、子供の振り返りから検証できる。

【学力の向上、定着へ】

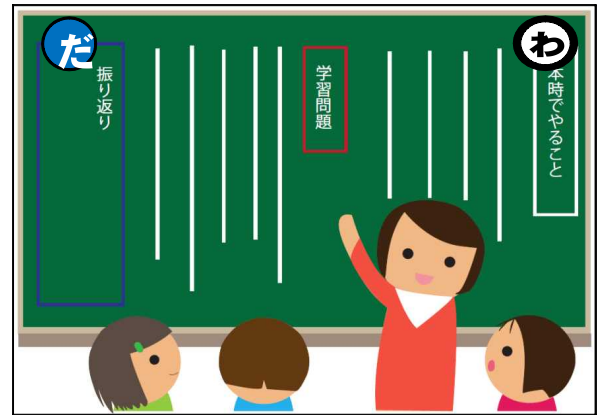
具体的には、全校で授業の形をそろえ、「どんなめあてで、どんなことがわかったか」を見える化した。

- ・授業のはじめに、子供と本時で学ぶことを共有する。〈ワーク「わ」・・・「わだ」の「わ〉

白枠で表示する。

- ・授業の終わりに、ねらいに沿った振り返りを行う。〈ダイアリー「だ」・・・「わだ」の「だ〉

青枠で表示する。



「わ」「だ」を明示した指導案（5年算数・6年国語）

5 本時について(6/11)	
(1) 本時の目標 異分母分数の加法の計算方法、計算過程の面積図での表し方について考えることを通して、異分母分数の加法の計算方法について面積図や既習の用語を用いて表現する。	
学習活動	留意点
<p>○ $1/\Delta + 1/\Delta$ に好きな数字を入れて計算してみよう ・分母が同じなら計算できる。・分母が違っても分母が同じになるように変換して計算できる。</p> <p>◎ 分母がちがう分数のたし算の計算方法を図と式を使って説明しよう</p> <p>○ $1/3L$のジュースと$1/2L$のジュースを合わせるとジュースは何リットルになるでしょうか。 ・式は$1/3 + 1/2$になる。・分母が一様なら計算できる。 ・通分を使って分母をそろえれば計算できる。・最小公倍数は6だ。 $1/3 + 1/2 = 2/6 + 3/6 = 5/6$ 計算では説明できるけれど、図はよく分からない。</p> <p>【$1/3 + 1/2$の計算方法を図で表すとどうなるのだろうか。】</p> <p>【面積図を縦に分割する】 ・分母が3⇒6と2倍になったから、縦に1本引いて、3等分をさらに2等分する。 $1/3 = 2/6$</p> <p>【面積図を横に分割する】 ・分母が3⇒6と2倍になったから、横の線も2倍にする。 $1/3 = 2/6$</p> <p>・分母が2⇒6と3倍になったから、横の線も3倍にする。 $1/2 = 3/6$</p> <p>$2/6 + 3/6 = 5/6$</p> <p>○面積図を使ってペアで、$1/3 + 1/2$の計算の仕方を説明しよう。</p> <p>◎ $1/3 + 1/4$の計算方法を図を使って説明してみよう。 ・$1/3$と$1/4$では、分母が違ってそのまま計算できないので、通分して計算します。2つの分母の最小公倍数は12なので、分母を12に通分します。すると$4/12 + 3/12$になり、$7/12$になります。</p> <p>【練習】(考え方) 異分母分数の加法の計算方法について、図や用語を用いて表現している。</p> <p>○確かめ問題を解いてみよう。</p>	<p>・同分母なら解けることを確認し、通分の考えの見直しをもたせる。</p> <p>・面積図を用い、答えの見直しをもたせる。</p> <p>・KK、YI、IS、MRが面積図で困っている場合には、1/2で色がついた折り紙を渡し、3/6にする折り方を考えさせる。</p> <p>・面積図の場面では、子供の様子に応じて、ホワイトボードを用いたグループ学習を取り入れ、理解を促す。</p> <p>・最小公倍数、通分という用語を用い、図を使ってペアで説明・評価することで、全員に表現させる場を保障し、考え方の理解を促す。</p>
つかむ	
深める	
振り返る	
<p>＜本年度の研修の重点に迫るために＞</p> <p>1 4年時の分数の学習についてのレディネスでは高い結果を残している子供たちである。前時で、通分を学んでいるため、異分母の加法の計算そのものには困らないであろう。そこで、「計算方法を図と式で表そう」と投げかける。図も考えさせることで、通分の意味を深めたり、分数の直感を育てたりすることは好ましい。</p> <p>2 本時の評価観点(考え方)である。そこで、振り返りではワークシートを使い、$1/4 + 1/3$の計算方法について図を用いて説明させる。そして時間があれば、練習問題にも取り組むようにしたい。</p>	

6 本時について(4/8)	
(1) 本時の目標 「中」の部分で筆者が言いたいことを、「言葉のキャッチボール」についての文章の要旨を捉えることを通してつかみ、それに対して自分の考えをもつ。	
(2) 本時の構成	
学習活動	留意点
<p>◎「中」の部分で西さんの言いたいことをまとめ、自分の考えをもつ。</p> <p>◎③段落の問いに対して、西さんの答えは何だろう。</p> <p>・西さんは③段落で「そうではない」と言っているから、人とは理解し合えると考えている。</p> <p>・西さんは、言葉のキャッチボールをすれば、人とは理解し合えると言っている。</p> <p>言葉のキャッチボールをすると、人と人が理解し合えるのはどうしてだろう。</p> <p>【本文から】 ◎言葉のキャッチボールをしていくと共通点だけでなく、相違点も見つかる。◎これは、わかり合えないということではなく、違いがわかったということだから。</p> <p>◎④たずね合うことで、少しずつおたがいの気持ちの細かいところまでわかってくるから。 ・人と話合うことで、おたがいに理解が深まっていくから。</p> <p>【自分の経験と結びつけて】 ・友だちと好きな〇〇について話している時に全話が読み、前よりその子と仲よくなった。 ・私語雑言を書き、同じ春だけど、自分とは違うもので書いた人と交流して感じがちがうことがわかりおもしろかった。 ・自分が話している時、反応してくれると、自分の考えが伝わったと思えてうれしい。</p> <p>◎おたがいの心を百パーセント理解し合うことは不可能だとしても、言葉や表情をやりとりすることによって、人は心を伝え合い理解し合える。</p> <p>西さんの言いたいことを受けて、今日の「西さんへ」を書こう。</p> <p>◎西さんは、人とは、言葉のキャッチボールをすることで、お互いを理解し合えると言っていますが、ほくもそう思います。席替えがあまり話したくない人と隣同士になつたけど、授業や給食の時間によく話をすることができて、相手のことがだんだんわかるようになりました。今では、とても仲良くなり毎日話をしています。西さんが言うように会話をすることは、人と人が理解し合うために大切なことだと思います。</p>	<p>・第2時でつかんだ全体の構成や問いと答えの関係をわかる図を提示し、どの子も今から学習するところが教科書のことなのかわかるようにする。(GA, HR, KH)</p> <p>・理解し合える理由を本文から探し、線を引きさせる。そして、小グループになりなぜそこに引いたか理由を言い合うことでどの子も学習に参加させる。(TM, NS)</p> <p>・「言葉のキャッチボール」がどういうことかイメージしやすく、挿絵を提示したり、板書を図式化してしたり工夫する。(GA, KM, OM)</p> <p>・本文の言葉に自分なりの解釈を入れて話したり、自分の経験と結びつけて話したりする子どもをほめ全体に広げる。出ない場合は、教師側から問い返す。</p> <p>・自分の立場を明確にした書き出しで振り返りを書く。</p> <p>【評価】(読むこと) 「中」の部分で筆者が言いたいことをつかみ、それに対する自分の考えをもつている。</p>
つかむ	
深める	
振り返る	
<p>＜本年度の研修の重点に迫るために＞</p> <p>1 説明文を読み物としては興味をもって読むが、筆者意識(筆者が伝えたいこと、筆者が工夫していること)を捉えて読むはまだまだできていない子どもたちである。筆者が伝えたいことは何か本文をもとに読みとり、友だちと話し合ったり筆者が挙げた事例をもとに自分の体験を話したりすることで、筆者の述べた「心の世界」に対して自分の考えを広げたり深めたりしたい。</p> <p>2 筆者が伝えたいことを正確に納得して受け取り、その伝えたいことに対して自分の意見や感想をもつために、筆者に宛てた手紙を書くという振り返りを行う。筆者の意見に自分の立場を明確にして、なぜそう考えたのか自分の体験と結びつけてまとめる姿を期待している。</p>	

「付けるべき力が身に付く授業」に向けて、取組を極力、シンプルにすることで担任以外の教師が指導する授業においても、学年が違っても、常に教師と子供が同じスタイルで授業を進めることができるようになった。

④ 指導法の工夫及び補充学習の充実

本校は3年以上の算数科の授業において、少人数指導(習熟度・等質)を行っている。本年度は、これに加えて、午前5時間制によって生み出された放課後の時間を活用し、補充学習「ぐんぐんの時間」を行っている(月・火・木 14:50～15:05)。昨年までは、漢字や計算の復習が主だったが、本年度は、その日の授業内容の復習や補足等に加え、授業における学習内容の定着をより確かなものにしようと試みている。

(2) 和田の授業づくりの時間確保に向けて（午前5時間制の導入）

① 「午前5時間制」の目的

一人一人の子供の理解のスピードや定着度には個人差がある。そのため本校では算数科において、習熟度別少人数学習を取り入れたり、補充学習を行ったりしている。また、子供同士の意見交換等の学び合いに多くの時間をかけたり、学習の定着のための指導も大切にしている。教師は、児童理解を深め、授業準備を万全にし、授業改善を実践しているが、「もっと授業時間がほしい。」という要望がある。特に高学年においては、全国学力・学習状況調査における静岡県の小學生に課題が見られる内容について、過去問題又は類似問題を集めた「チアアップシート」へ取り組んだり、本調査において明らかになった課題克服のための補充指導を行ったりする時間も必要である。

このように子供たちが登校してから下校するまでの限られた時間の中で多くの手だてを行うことが必要になった。そして、本校は平成27年度から「授業づくり」の時間を確保するために「午前5時間制」を取り入れた。

② 「午前5時間制」とは

本校は、午前に45分授業を5コマ行っている。そのため、従来の午前4時間、午後2時間の日課と比較して、学校行事等による午後の授業の打ち切り時間が減少し、午後からの教師の出張等による自習や担任の代わりに他の教師が入ったりする時間も減った。その結果、大幅に授業時間が増加した（前年度と比較して予備時数が低学年平均約50時間、高学年が約45時間増加）。

その分、教師は時間をかけて一人一人の理解のスピードに合わせてきめ細やかな指導をしたり、チアアップシート等の復習に充てることができた。また、水、金曜日は14:30には完全に下校が可能になった。

(3) 家庭との連携（「合い言葉は『共育』」）

本校児童は、「家庭学習の習慣化」が課題として挙げられる。そして、基本的な生活習慣や規範意識同様、保護者との連携が不可欠である。そのため、懇談会やPTA講演会等を通じて、テーマを「合い言葉は『共育』」としてPTA活動を主として取り組むこととした。

① 焼津市版家庭教育啓発リーフレットの活用

焼津市教育委員会作成のリーフレットをもとに総会や懇談会において取組の共通理解を図ることで「共育」体制を構築した。

② PTA教育講演会

小中学校合同のPTA教育講演会の講師に「親野智可等（おやのちから）」氏を招き、「合い言葉は『共育』」をテーマに学習することができた。

(4) 学びを支える取組

① ことばプロジェクト

言葉で理解し、言葉で表現する力を伸ばすために、年間を通して語彙を増やす掲示を行ったり、言葉をテーマに授業を行ったりする活動を行っている。

② 読書活動の充実

読書の時間を毎日10分確保したり、学年毎に選んだ本を全児童に与えることで読書に親しむ子供が増えた。本の貸し出し数を比較しても年々増加している。

③ かんげい教室

本校には、4カ国の外国籍児童や日本籍ではあるが日本語指導が必要な子供への支援のために「かんげい教室」がある。昨年まではほとんど全ての指導を個別指導で行ってきた。しかし、本年度から、異学年の同じ国籍同士の学習や異言語の同じ学年同士の組み合わせで学習を試みている。その結果、子供同士による教え合いの姿が見られるようになった。

④ 授業におけるユニバーサルデザイン

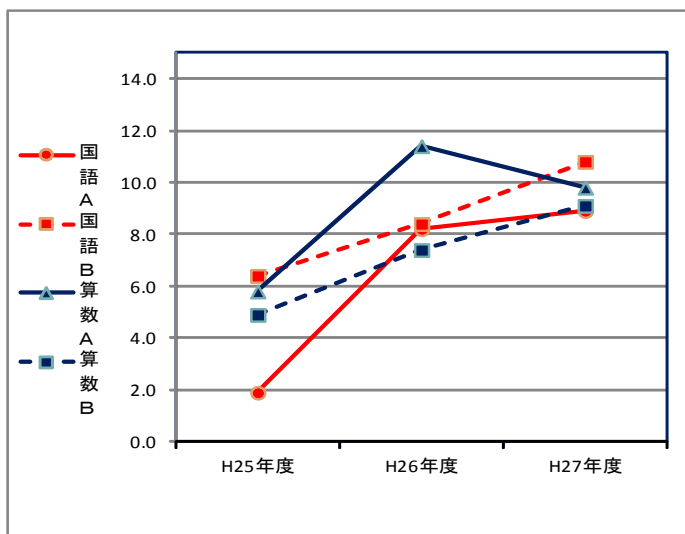
主に「視覚化」にポイントを置いて特別な支援を要する子供だけでなく、全ての子供が集中しやすい環境作りを進めている。

⑤ 早期対応策及びチアアップシート

4月の全国学力・学習状況調査終了後、すぐに採点を行っている。調査を受けた子供が自分の間違いや理解できていないことをテストが終わって記憶が鮮明なうちに確認し、その後の学習に生かすとともに個々の教師が、今求められている学力を把握し、校内で共有し指導に生かしている。

3 取組の成果の把握・検証

(1) 「付けるべき力」について

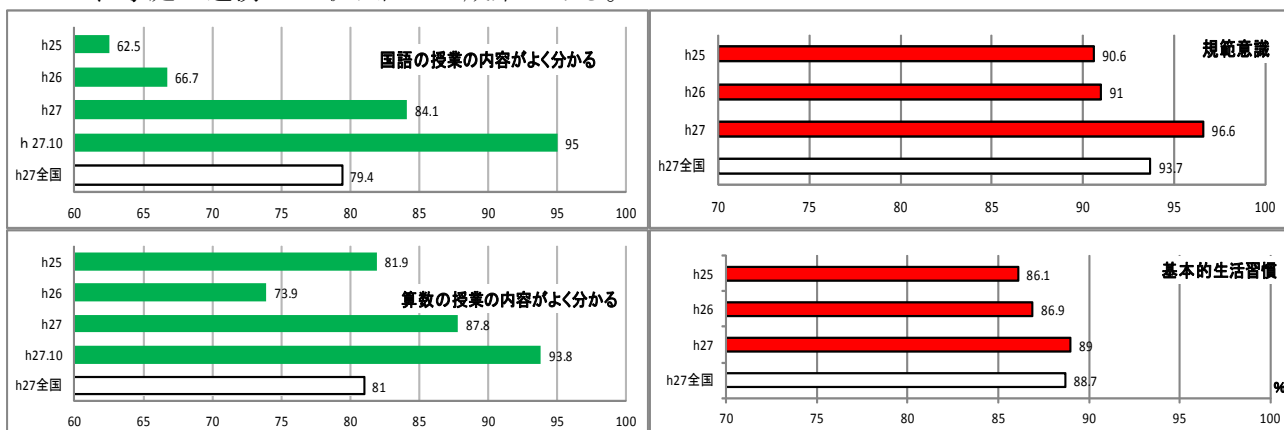


過去3年の全国学力・学習状況調査の結果を標準化得点から見てみると、国語 AB、算数 B は年々伸びていることが分かる。特に B 問題の結果が上がっている。

これは、付けるべき力を明確にし、単元構想を工夫し、国語では目的に応じて文章を読んだり、条件に従って文章を書いたりする場面を意図的に設定し、算数においては根拠をもとにした理由を説明したり、筋道を立てて考えたことを説明したりする場面を設定する授業改善の成果と考えている。今後、1時間1時間の学びを確実にしていきたい。

(2) 学習状況について

国語、算数ともに「授業の内容がよく分かる」割合が大きく伸びた。また、生活面での課題であった「基本的な生活習慣」及び「規範意識」も大きく改善された。これは、「合言葉は『共育』』として、家庭と連携して取り組んだ成果である。



(3) 和田の授業づくりについて

教師へのアンケートの結果、ほとんどの教師が「学年で授業について相談できる時間が増えた。」「放課後に時間があることで、子供たちの具体的な表れをもとに教材研究を深める事ができた。」「授業準備や個人研修もたくさん行うことができた」等、昨年度に比べて、「和田の授業づくり」の時間が増えたことを実感していることが検証できた。

4 今後の課題

「和田の授業づくり」の取組により、「付けるべき力」が身に付く授業の具現を図ってきた。この取組を今後も継続していくことで本校の課題は少しずつ克服できる見通しをもつことができた。その中で特に学習習慣については今後も更に家庭と連携していく必要があると感じている。

